

剣の四君子

柳生石舟斎

吉川英治

青空文庫

草廬そうろの劍

一

新介しんすけは、その年、十六歳であつた。

大和国かんべ神戸しょうノ庄、小柳こやぎゅうじょう生城あるじの主、柳生みまさか美作のかみいえとし守家しゅけ嚴げんの

嫡男ちやくなんとして生れ、産れ落ちた嬰兒えいじの時から、体はあまり丈夫

なほうでなかつた。

母なる人が、青梅あおうめの実みにあたつて、月盈みたぬうちに早産した

せいだとか。——いわゆる月足らずの子であつたとみえる。

「戦いくさに出たい。戦に連れて行つて下さい」

彼も、武門の子である。合戦のあるたび父にせがんだ。

が、父の家蔵は、

「そちのような弱い肉体では、戦いに出ても物の役に立たぬ。柳生の一族は、病弱な子まで狩り出したと、敵方に笑われよう。――

――そういう望みは断たつて、むしろそちは僧侶になれ、学問をして

おけ。柳生家の累るい代だい、戦に次ぐ戦に、代々何十名の戦死者があ

つたか数も知れぬほどだ。そちの兄、康太郎やすも二上山ふたがみやまの合戦に

討死した。叔父御もおとしの出陣から帰らなかつた。……のう、

そういう人々の霊とむらを弔とむらうべく、僧門に入るのも意義のないことで

はない。そちの体の生れつきひよわいの、一族の中から一子はそれに捧げよとの、仏天のいいつけかも知れないのだ。宿命というものである。いらざる憂悶ゆうもんは抱かぬがよい」と、懇ねんごろに諭すのであった。

「……………」

新介は、黙って聞いているが、いつも涙をこぼした。顔を横に振るたび、その顔から涙が飛んだ。

「わからぬやつ！ 女のくさったようなやつ！ 嫌いだつ、あつちへ退がれつ」

果ては、その涙へ、恐こわい顔を示して、家蔵は大喝した。それも、父性の大愛から迸ほとばしる声以外なものではない。

ところが。

ことし天文十三年の七月には、その父が好むと好まないに関わらず——子が望むと望まないに関わらず——否応のない戦火が、柳生父子を、一つ戦場に捲き落した。

連年、鎬しのぎを削りあつてきた宿敵、大和の筒井 栄舜えいしゆんぼうほういんじ房法印ゆんしょう順昭が麾下二十万石の領土の精兵を、挙げて、この小柳生ノ庄のわずか七千石足らずの小城ひとつを、取巻いて、

「三日のうちに踏みつぶして見せる」

と、豪語し、その山上山下、野も畑も部落も、兵馬に埋めてしまったのである。

新介は、こうした危急が、わが家の石垣やの下まで迫つたのを眺

その血が黒くならないうちに、次の敵が、また石垣につかまつて攀^よじ登^{のぼ}つてくる。

岩石、材木、沸湯^{にえゆ}——糞泥^{ふんてい}までを、執念ぶかいその敵に浴びせかけた。

「多聞院日記」の記事によれば、この時の激戦は、三日に互^{わた}るとあるが、「柳生家家譜^{かふ}」には、七日を過^{すぐ}とある——
何にしても、相互^{おびただ}、夥^{おびただ}しい犠牲を出して、揉^もみ戦^{さん}った酸鼻^{さんび}は分る。

筒井勢は、小柳生の在家散郷へ火をつけたから、その煙は、天を焦がし、畑はふみ荒され、百姓のすがたはおろか、家畜の影も絶えてしまった。

糧食の道、水の手の落口も、断たたれてしまった。城中の兵は、眼に領内の焦土をながめ、身のまわりには、飢渴きかつか死の影しか見られなかった。

が、なおも城は、頑強に落ちなかったので、筒井順昭じゆんしょうは、自身伊賀を発して、忍辱山にんにくさんに陣を取り、

「これしきの小城に、七日もかかって、なお落ちぬと四隣に聞えては、筒井衆の名折れぞ」

と、激励した。

順昭は、後の筒井順慶じゆんけいの父にあたる人である。順慶とちがつて、英武な名将と知られていた。——その忍辱山の陣所へ、柳生方の捕虜が一名、高手小手に縛られて来た。

その晩も、諸所の放火、陣地陣地の篝かがりなどで、夏の夜空は、真
つ赤に煙つて、地の草露に虫の音もなかった。

「坐れっ」

「それへ直れっ。——直らんかつ」

縄付の弱腰を蹴つて、一群の将士が、床几しょうぎの前へ突きのめし
た捕虜を一目見ると、筒井順昭は、

「ああ待て。手荒にするな」

と、思わず眉をひそめずにいられなかった。

「女か。病人か」

順昭は、まず訊ねた。

見るからに弱々しい一名の敵を、大勢して、さも手柄顔に生擒いけどつて来た味方の将士も、むしろ不快とするような順昭の語気だった。

「わしは、女ではないつ。病人などでもないつ。——柳生家いえとし嚴むねとしの嫡男、新介宗むねとし嚴むねとしなのだ。はや首を打てつ。首を打て！」

順昭の声に応じて絶叫したのは、彼の部下ではなく、彼の前にひき据えられている捕虜だったのである。

「何つ。柳生家の総領じやと」

順昭が、思わず眼をみはると、籠手こての傷口を縛りながら、縄付

のうしろに付いて控えていた朝山氏堯あさやまうじたかという緒顔しやがんの勇将が、頭を下げて答え直した。

「幾度、水の手との樋といを断ち切りまして、いつの間にか、城内へ水の通っている容子なので、それがしの手勢を伏せておきますと、夜ごと、この若武者が、決死の一隊をひきつれて、搦手からめてから裏山へ攀よじ、貯水池の樋をかけ直し、水路をひいて城内へ走りこむのを見届けました。——で、こよいこそと、それがし自身、待ちかまえて、袋づつみにしましたが、若年とはいえ——また、見たところ、仰せの如く、病人か女のような弱々しい姿に似に気なく、死にもの狂いに抵抗し、味方の兵を、八、九人まで斬りつづけました」

「……ふうム？」

順昭は、呻うめきながら、毅然きぜんとしてゐる捕虜の色白おもてな面に、じい
つと、眸をすえたまま聞いていた。

「——憎ツくい小冠者めがと、それがしが槍を突けると、それに
おる野添盛八、漆間うるしま八郎右衛門の両人も、左右から力を協あわせ、
追いつめ追いつめ、扇おうぎ形の空濠からぼりの窪くぼへ、敵が足ふみ外して
転ころげ落ちたので——討つなど、野添の槍を止めて、引つ縛からげて参
つたのでござります。——縛からめ捕つてから気づいたのは、意外に
も、それが城主柳生家いえとし嚴の息子であつたということです。さし
て手柄とも存じませぬが、他ほかならぬ敵將の嫡子、君前さきに献ささげるの
が至当と考え、物々しゅう思し召されましたろうが、ともあれこ

れへ引つ立てて来た次第でございまする」

「そうか。……いや、よく縛からめて来た」

順昭は、初めの氣色を改めて、

「小冠者、面こかんじゃ おもてを上げろ」

と、柳生新介を、睨ねめつけて、もう語氣の端にも、不愜ふびんなどはかけていなかった。

新介は、死闘に燃やした眸を、まだそのまま持つて、容かたちこそ、
自若じじやくとしていたが、

「面は上げておる。これ以上あげて、天を笑えというか。首を刎はねる際には、頸うなじは伸ばすものと心得ておる。いらざる多言はお互いに無用であろう。はやく首を打てっ」

と、さすがに声は甲走かんぱしっていた。

四

暁早い短夜。——濛もうもう々とこめる戦雲と朝霧に明けて、夜もすがら戦い通した籠城の兵に、ふたたび飢餓きがと、炎暑と、重い疲労が思い出された朝の一瞬ひととき。

「新介様あつ」

「若殿うつ。——若殿には、何処いずこに」

搦手からめての兵たちが、大曲輪おおぐるわから大手の辺りあたまでを、血眼ちまなこに、

捜さがし合っていた。

それと同じ頃に、望楼やぐらの上では、

「敵が退ひいたつ。筒井勢は、いつのまにか、全軍退ひいて、今朝は、一兵も見あたらぬぞつ」

と、狂気して呼ばれる声もしていた。

敵が囲みを解いて、総退却したという歓びと、同時に、城主の嫡男の姿が見当らぬという憂うれいの声とが、黎明れいめいの一瞬に、齎もたらされたのであった。

城外の水の手附近で、新介にしていた部下は、全滅していた。生き残った者も、割腹かつぶくしていた。——が、新介の死骸はなかった。

「……もしや？」

父の家いえとし嚴を初め、城中の者が、挙こぞつて案じていた一つの推定は、その日の午うまの刻になって、不幸にも、適中していたことが知れた。

囲みを解いて引揚げた敵の筒井城から、軍使が来た。

「御子息の生命は、捕虜として預かつてある。降伏人として、城池を出らるる場合は、御子息の身は返して進ぜる。——御評議もあろうゆえ、回答には、三日の猶予ゆうよをお待ち申すであらう」

軍使は、すでに勝者の態度で臨んで来たのである。いずれを**す**ずい**い**ぶも随意と、あつさり告げて歸つた。

歸つた後、慘たる一族の顔が、大曲輪おおぐるわの一室に集まつた。どの顔も、眼は落ち窪みくぼ、髪は茫々として、血や泥や汗のうえに、

さらに、濃い憂色に塗りつぶされていた。

「……どうするか？」

それだけのことだが、一致は難しかった。

いえとし家嚴は、父として、心強く云う。

「生れながら、武門の後継あとつぎとはなりかねる病弱な子だ。いつかは、僧門へ入れようとすら思い断っていた新介……。祖父以来の城池と名誉にはかえられぬ」——と。

だが一方。

親族の柳生河内、菅原夕菴せきあん、譜代ふだいの木村五平太、服部はつとりおりべ織はたもと部介のすけ、庄田喜兵衛次きへえじ、和田、野々宮、松枝などの老臣旗下たち、

「仰せではありますが、それは殿のお眼ちがいでありまた、われわれどもも、昨日^{きのう}まで、まったく若殿を、お見損ね申していたので、今日となつては、断じて、新介様を見殺しにいたすわけには参りませぬ」

と、頑強に云い張った。

三日の猶^{ゆうよ}予は、経つてしまった。しかもなお、家嚴の意見と、臣下の意見は、一致を見なかった。家嚴としては、生けるわが子を受け取つても、筒井家に屈する恥辱を受けるに忍びなかった。また、自分のみか、城中七百の忠勇な将士をして、敵の足もとへ、^{はいき}拝跪させるに耐えなかった。——どう考えても、武門を捨てて武人はない。そうしか思えなかったのである。

すると。

三日目の黄昏^{たそがれ}、一書が届いた。

やまといこま

大和生駒郡の筒井城からである。——が、書面は公式なもので

はなく、また、敵からでもなく、そこに捕われている柳生新介から父へ宛てて来た私信であつた。

五

敵の中にあるわが子。何を齎^{もたら}してきたこの手紙か。——父家^{いえと}
 敵の手は顫^{おの}かずにいられなかつた。

——が、披^{ひら}いて、一目、その文字の様を見ると、何か、彼はす

ぐほつとした。少しも字体が乱れていなかったからである。

文面の意味は、次のようなものであつた。

父上。

さても人間とは明日も^{あした}知れないものであります。きのうまで御^ご膝下^{しつか}で甘えておりましたが、きようは見も知らぬ敵方の中に、捕虜の身となつてゐること、ふしぎなる天命と、柔順に深思しております。

不覚とは思いません。新介は、最後まで戦いました。恥ともいたしません。勝敗は兵家の常です。一生は今日だけのものではありませんから。

むしろ私はこの天命を奉じて歓びさえ覚えています。生れて十

六年、不孝のみ重ねてきたこの病骨が、今こそ幾分のお役に立つかと存ぜられます。新介はすでに討死なしたるものと思し召され、この身を筒井家の質ちとなし、即刻、和議をお講じ下さい。

そびよう

祖廟の地こそ、病骨の子ひとりよりは、大事な筈です。忠勇な家士の面々こそ、私一人などには代えられない柳生家の石垣かと考えられます。

どうぞ御善処ありますように。

さもあらばあれ新介もまた、自ら生きゆく道を選んでゆくでしょう。御膝下を離れてむしろ今、人となる道を訓おしえられ、また、御両親様の大愛の一しお身に迫るものを新たに覚えております。では呉くれぐれ々々も、御自重のほどを。

筒井城内の短檠たんけい一穗すいの下もとにて誌しるす

新介拝

父うえ様

「……………」

家いえ嚴としは落涙がとまらなかつた。玉ぎよく碎さいを潔いさぎよしとして主張し

ていた一徹な愚かさを、日ごろ病弱あつかいにしていた子から訓えられて、背に百杖を下された心地に打たれた。

「そうだ。云うが如く、善処いたそう。……新介の志を生かして」
評議の間へ出ると、老臣以下、まだ暗澹あんたんとそこに坐っていた。

家嚴は、面々が夜に入つたのも知らずにいる態を見て、

燭しよくを燈ともせ」

と、武士どもへいつけた。そして、

「燭が燈つたら、一同これへ寄れ。ただ今、敵方における新介から、かような書面が届いたに依つて、改めて諮^{はか}りたい」

と、新介の手紙を示した。

それを見て、泣かない家臣はなかった。或る者は、声をもらして鳴咽^{おえつ}した。

「——ついては、わしの心も決した。この新介が手紙の文面を篤^{とく}と見よ。降伏とは書いてない。和議を講じてくれとある。ここに新介の真意があるらしい。——降伏は受け難いが、和睦^{わぼく}を結ぶなれば悪しかるまじ、その代りに、自分は質子^{ちし}として、筒井家に留^{とど}まる——という存念と相見える」

評議は一決した。

新介の意を旨^{むね}として、即刻、筒井家へ使者を送った。使者は、

「降伏は申し出ぬが、和議なれば応じ申そう。条件としては、嫡男新介宗^{むねとし} 厳様を、長く質子^{ちし}として貴家へお預け申すべしとの主人家^{むねとし} 厳が意見にござります」

と、口上で伝えた。

これでは、対等にひとしい返答である。筒井方の不満は明らか
なように思われたが、意外にも、

「承知いたしました。御提示の条件をもつて、宿^{しゆくえん} 怨^{えん}を水に流し、
改めて、隣交の誼^{よし}みを結び申そう」

と、筒井順昭は、一言に許した。

思えば危うい限りだった小柳生の城も——天^{てんぎよう}慶以来つづいて来た柳生ノ庄七千石の領土も——ために、計らずも無事なるを得た。筒井家の属国的な位地に落ちたことはぜひもなかったが、ともあれ新介の身一つで、父家蔽以下、多くの家臣までも、一応は滅亡の淵から救われた。

六

兵は強く、領土は広い。

覇^{はぎよう}業を成した人物だけあつて、筒井順昭は、やはり一世の雄^{ゆう}であつた。

彼に足らないものは、子であつた。女子のみが多いのである。

一男は夭折ようせつし、その下の藤勝ふじかつはまだ幼い。

「他家の質子ちしながら、新介ほどの嫡男があれば」

とは、彼がいつも独り思うことだつた。

合戦には十分に勝つていながら、また、筒井家とは比較にならぬほど領地も狭いし兵力も乏とほしい柳生家と、対等に近い和議を容いれたのも、捕虜として連れて来た新介の飽あくまで毅然きぜんたる態度と、一族を思う至誠に動かされた結果だつた。

「藤勝ふじかつ。そちもちと、新介を見習えよ。いつまでも家臣どもに

甘やかされて駄々こねばかり捏こねている和子様であつてはならぬぞ。新

介の刻苦こくくに見習うて、朝は夙つとに起き、馬術、弓道の稽古けいこに励み、

読書もせねばならぬぞ」

四年間。——新介が質子^{ちし}としてここへ来てからいつか四年となる、——その間の彼の起居や修養ぶりに感じるたびに、順昭は、わが子にひき較べて、藤勝^{ふじかつ}を訓戒せずにはいらなかった。

「はい。はい」

藤勝^{ふじかつ}は、ことし十五である。父の前では、非常に畏^{かしこ}まるが、駄々^{ちんだ}で懶惰で底意地がわるい。順昭の歿後、領土をうけて、伊賀に本城を移し、筒井順慶と称したのは、この藤勝であつた。

父から叱られるたび、新介の名が手本に出される。藤勝は、その反動で、城内に住むもののうちでは、誰よりも新介が嫌いだった。犬よりも下に新介を見蔑^さげていた。

この新介は、城内の片隅に、質子ちしがま構えと称いわれる小さい一棟を
当てがわれて住んでいた。戦国の世の慣ならいで、強国の城廓には、
幾人も他国の質子が養われていた。

「弁之助。また、あの擒とりこ人の新介が、経文みたいな書を読んでる
よ。石を投げこんでやれ、喧やかましいから」

藤勝は質子構えの牆かきを覗いて、供の近習にいいつけた。

「そんなことをなすつてはいけません。およしなさい」

「お前が抛ほうらなければわしが抛る」

小石を拾うと、止める間もなく、屋やの内へ投げこんだ。

家の中で、石の弾はじける音がした。しかし、読書の声は止まなか
った。

「まだやっているな」

意地になつて、三ツ四ツと投げこんだ。すると、かき 塙の小門が開いて、

「わるさ 悪戯をするのは何者ですか。そんなことをなさると承知しませんよ」

と、怒つて出て来た者がある。

見ると、新介ではない。女である。しかもふじかつ 藤勝の姉にあたるゆりじよ 由利女であつた。

「あらつ？ ……。姉上は、何だつて、ちしがま 質子構えになんか来ているんですか」

「いいでしょう。来てもいい」

「いけませんよ。擒人とりこのいる囲いへなんか……おまけに、男の所へ、女のくせに」

「あなたこそ、今、何を投げたのですか」

「石さ、いけない？」

「なお悪いでしょう」

「大きなお世話」

「今日ばかりではありません。のべついろいろな悪戯わるさをして」

「じゃあ、姉上ものべつ来ているんだな」

「お可哀そうではありませんか」

「誰が」

「新介様のことです。ですから、時折、お見舞に来て上げるので

す。其方^{そなた}だつて、もし戦^{いくさ}に負けて、敵方へ質子^{ちし}となつて行つたら、どんなに思いますか」

「父上にいいつけてやるぞ。こんな所へ、女のくせに、遊びに来て。——弁之助。行こう」

姉には敵^{かな}わない。藤勝はぶいとそこから立ち去つてしまった。

七

「父上。由利^{ゆり}どのは、質子^{ちしがま}構えにおける柳生新介の所へ、時々、行つておりますよ。いいんですか、あんな所へ女が行つて」

藤勝^{ふじかつ}が、或る折、口を尖^{とが}らして、順^{じゆん}昭^{しょう}へ告げ口すると、

順昭は、非常に怖い顔を示して、反対に叱りとばした。

「何を云う。由利は、学問好きゆえ、新介がよく書を読むので、解らぬ所を質し^{ただ}に行くのじゃ。そちもちと、新介について、学ぶがいい」

藤勝はまた、新介のために叱られた。

順昭は、すでに自分の末娘の由利を以て、密か^{ひそ}に新介へゆるしていたのである。和睦して六年、柳生家との間も、その後は至つて円満なので、わが娘の一人を柳生家に入れ、それを機^{しお}に、新介の身も、花嫁の輿^{こし}と共に、柳生ノ庄へ帰してやろうと考えていたのだった。

父のそんな深い胸は知ろう筈もなく、藤勝は、それから四、五

日後、新介が馬場から帰る途中に待っていて、

「おい、おい、擒人とりこの新介。待て」

弁之助と二人で呼び止めた。

新介は、馬の稽古の帰りなので、身軽に扮装いでたち、少し汗ばんだ顔をしていた。

「これは、若殿でございましたか。何かご用ですか」

「おまえ、幾歳いくつになる」

「二十一歳に相なりました」

「二十一にもなって、まだ質子ちしか。よその国に飼われているのか」

「……はい」

「お前の体からだは、お前の体ではないのだぞ」

「はい」

「何でもはいはい云っているぞ。お前は意気地がないな」

「恐れ入ります」

「恐れ入ったら、俺の股またを潜くぐれ」

「はい」

「張合いのない奴だな。そんなに尾を振られては、おかしくない。

……怒れ、怒ってみろ」

「……………」

「何を笑う。怒れと云っているのだ。こら、怒らないか」

脛すねを蹴ふった。胸を突いてみた。それでも新介が怒らないので、

図に乗った藤勝ふじかつは、いきなり彼の耳を掴つかんで引っ張った。

新介は、それでも逆^{さか}らわなかつた。犬のように引廻^{ひくまわ}されていた。
藤勝は、

「犬じゃ、犬じゃ、犬でも怒^{おこ}るが、この犬は、臆^{おく}病^{びよう}犬だ」
突き離すと、その顔へ、唾^{つば}を吐いて、逃げて行つた。

新介は、懷紙を出して、顔の唾を拭きながら、さしたる血相も
現わさず、静かに歩き出した。すると、物蔭から一人の武士が、
寄つて来て、

「新介どの、よい御修行だな」
と、その肩を叩いて慰めた。

——誰か？

と、振向いてみると、それはこの城に二カ月ほど前から滞留し

て、家中の士に劍の法を教えていた神取^{かんどり}新十郎とよぶ^{しんとうりゆ}新当流^うの武芸者であつた。

新十郎はまた、新介の耳へ、こう信念をもつて囁^{ささや}いた。

「あなたは今に名を成すだろう。きつと大成する質だ。大事になさいよ」

八

天文二十年、新介^{むねとし}宗厳は、二十五歳になつた。

その春、彼は、由利女^{ゆりじよ}を携えて、十年ぶり、柳生の城へ歸つた。

——が、父の家蔵はもうこの世にいなかった。彼は、山間の八千石に足らぬ瘦地やせちと、数百の家臣と、古びたままの小城うとを享けて、乱世の中からさらに乱世へと臨んで行つたのである。

永祿二年。筒井順昭もすでにその頃病死していた。

時は近づいた。信貴山城しぎさんの松永久秀が、大和へ攻め入る事前に、
「呼応こおうして、南の地より、筒井領へ斬り入れられよ」

と、筒かんを通じてきた。

この時から、柳生一族は、筒井の隸属れいぞくから離れた。そして松永弾正だんじようの七手の旗頭はたがしらとして重用された。

多武ノ峰とうみねの合戦では、山徒の僧兵と戦い、松永氏の勢たかが昂まるに従つて、柳生家も当然、隆昌に向つたが、その弾正久秀が、三

好義繼と共に、永禄八年の夏、二条御所へ放火して、乱刃の下に^{もと}、
 將軍義輝^{よして}を弑^{しいぎやく}逆^{さか}してから、柳生宗嚴^{むねとし}は、彼にもすつかり
 望みを断つて、

「わが兵馬は、逆のために動かさず。わが劍は、乱のために把^とら
 ず」

と、絶縁状を送りつけて、それ以後、ただ山間の孤城に拠り、
 深く守つて、敢て、天下の乱へ出なかつた。

義輝將軍の亡き後の京洛は、まるで無政府状態に近かつた。中
 央の乱は当然、諸州に波及して、いよいよ天下大乱の相貌^{そうぼう}を呈
 して來た。

禅に。

読書に。

また、養身鍛心に。

世の春秋もよそにして、以来数年のあいだというものの、柳生宗
 厳は、まったく門を閉じ客を謝して、草廬に籠そうろ こもっていた。

柳生から近い月ヶ瀬に、ことしも鶯うぐいすの声たにがわが溪川伝いに聞えて

きた。——折から、奈良の宝蔵院ほうぞういんの僧を案内として、柳生村へ
 入って来た一行九人づれの武士がある。騎馬で先に立った人物は
 わけて風格が高い。

一行は柳生城の坂下門で駒を下り、宝蔵院の案内僧は、門をた
 たいて中の番士へ告げた。

「——前もって、書面にて申し上げておきましたお客方、元、上

州箕輪みのわの御城主、上泉伊勢守かみいづみいせのかみ どのを御案内申しあげて参りました。宗厳様へ、その由、お伝えをお願いいたしまする」

弓の家

一

「奈良の宝蔵院ほうぞういん」の住職で、胤栄いんえいという変った法師がある。宝蔵院流と称する槍をよくつかう。

宗厳むねとしは、彼をさして、

「わが道友」

と呼んで深く交わっていた。

彼も「道」をさがしている人間だった。宗嚴も「道」を求めて
 熄^やまない。人生の道、兵法の道、禪の道、極まりのない道である。

——おたがいに迷悟の定まらない者同士が、

「人と生れたからには、何とかして、人間が到り得る境地まで、
 この心を磨いて、辿^{たど}り着いてみたい」

という熱望の悶^{もだ}えを——いわゆる道心を——常日頃から語りあ
 っている仲であった。

月々、父母の忌日には、必ずその胤^{いんえい}榮が自身で読^{どき}経^{きやう}にやつ
 てくる。そしては、お互いの修行を語りあっていたが、つい四、

五日前に見えた折、

「時に、わしは近頃、稀代きたいな人を見たぞよ」

と、胤榮いんえいが云った。

「稀代な人とは」

宗嚴が問うと、

「劍の達人じゃ。いや名人の境に達していよう。人品もよい。深淵をのぞくようでな。乱世ちまたの巷ちまたからもあんな人物が出るものかう」

「よほど傾倒されておられますな。御僧はいつたい、なかなか人にゆるさぬ方だが」

「四十年来、わしが参ったと感じたのは、ひとり伊勢いせのかみ守殿だけ

じゃ」

「伊勢守と云われますか」

「もと上州大胡おおごの城主であつたが、後、長野信濃守に仕えて一方の将となり、その主家長野氏も武田信玄に攻略されたので、以来、甲州武田家に随身して、客分同様、氣ままに諸国を遊歴しておらるるとか」

「えつ。……では、かみいずみひでつな上泉秀綱殿ではありませんか」

「御存じか」

「近頃、兵家のあいだでは、恐らく知らぬ者はございますまい」

「それにしては、まこと寔にけんじょう謙讓なお人からではある」

「その伊勢守殿と、御僧はどこでお会いなされましたか」

「わしの寺で」

「ほ。何として？」

「訪ねて御座られたのじゃ。その前に、伊勢の太の御所——あの北畠具教卿を訪ねられ、具教卿より、奈良へ渡られたら、胤いんえ栄いという変な坊主といちど会って御覧なされと聞いて来られたらしい」

「ああ。残念なことをしました」

「なぜな？」

「会い難い御仁ごじんに会える機を逸したではございませんか」

「そんなことはない。まだ当分は、わしの寺に遊んでおるといっている」

「や。まだ御滞在ですか」

「いつでも御案内して参ろう。柳生城の当主宗厳むねとしどのにも、兵

法の道には執心しゅうしんと、ゆうべも何かの折、おうわさしたところ、

一度は御見ぎよけんに入りたいものと、伊勢どのにも云われてござった」

「何の、自分こそ、願うてもない倅せ、おさしつかえなき日を仰せ下されば、当方より出向くのが礼儀。御内意を聞いておいてください」

「よろしい。さつそく、寺へ戻ったら伝えてみましょう」

ところがその翌日、胤栄から折返して来た使いの手紙によると、伊勢守がいうには、自分は、武田家の客臣ではありまた、兵法修行のため遊歴中の身である。それにひきかえ、柳生殿には、一城

の御当主、領民への御体面もある。先にお訪ねをうけては恐縮、自身から出向いて、御拝眉ごはいびをねがおう。——そう当人の伊勢守が希望することであるから、近日、寺僧を案内につけて、お城まで参上する。当日は自分は同道できないが、さだめし興きようある御清談が交わされよう。取敢とりあえず、御返辞までを、と認しためてあつた。

——それが、今日の伊勢守の来訪となつたのである。勿論、前ただの日、宗厳から命じられてあるので、番士は、直ちに城門をひらき、そこにはまた、

「ようぞお越しを」

と、老臣以下、幾人かが出迎えに立ち並んでいた。

二

「お客様が見えられました」

小侍が、先にひとり、大手の坂道を駈け上つて来て、宗むねとし嚴との
いる庭先から告げた。

宗嚴は、朝から心待ちにしていた。

「そうか。今参る」

沓くつぬぎ脱ぞうりから草履をはいて歩み出た。

彼はことしもう四十七歳になる。

妻の由利ゆりとのあいだには、長男嚴勝としかつ、次男嚴久としひさのふたりの
子もあつた。

いつか父となつて——初めて亡き父の心がわかる心地も屡

《しばしば》であつたが——劍の道に志してから、彼はふたたび、幼稚な己おのれに歸つてしまつた気がする。

未熟

煩惱

迷妄

邪心

あらゆる痴人のもち前の短所と、身のみ大人になりながらなお、どこか大人になりきれない幼稚なものとか——四十七歳の自分を見まわす時、情けないほど、こびりついている。

抜いても抜いても伸びてくる雑草のように、未熟から脱けられ

ない。迷妄から離れられない。邪心の濁りから澄みきれない。

こんなことで、劍の工夫などなろうか。

時には、諦めて、捨てようとした。

しかし。

劍を捨てたら、自己の醜さを、明らかに、自己に映してくれる

ものは無くなる気もする。

劍は鏡だと思う。

明澄な劍。——純一に心を研ぎすまそうとする劍。不断な心の

緊張。

その道を捨てたら、何が、自分を救ってくれよう。——亡父のいた時は、亡父の訓誡に、たえず歪みを撓められていたが。

……などこの日頃、頻^{しき}りと思い悩んでいた折も折である。宗
 厳は、

「抑^{そも}、どんな人物か」

と、客の伊勢守を想像しながら、出迎えのため、彼方へ足早に
 歩いてゆく間も、何か少年じみた動悸^{ときめき}さえ抱いていた。

三

この山は古い、砦^{とりで}作^{つく}りの城も古い。

柳生一族が、この土地に住みはじめたのは、平^{たい}将^{いらのまさかど}門^{かど}の乱

があつた承平、天慶の時代からであつた。

氏は、菅原の系類で、遠祖は、春日神社の神職をしていたが——
 武家勃興ぼつこうの機運から、ここの城寨じょうさいに拠よつて、弓矢を兼ね、
 いつか豪族となつて、源頼朝の覇はが成つた時、初めて柳生谷三千
 石を本領と扶持ふちされた家がらであつた。

北条氏が強権を執つた頃、いちど敗れて一族離散したこともあ
 つたが、後にまた、本領を回復し、後醍醐ごだいご天皇が笠置山かさぎやまに行幸みゆき
 遊ばされて、官軍を召し募つられた折には、柳生一族からも、中之
 坊という勤皇僧が出て、笠置衆徒に列し、正成まさしげの帷幕いばくに参じ、
 建武の復古によく働いた。

——そんな話も、宗厳むねとしは、御先祖の事績として、幼い時から
 よく聞いていたものである。

玄関前の巨おおきな杉。槇まきの喬きょう木ぼく。

そこらの苔こけや草。

老仙のごとき磐ばん石じやく。石を縫うさき流れ。

みな、それからの物であつた。

宗巖は今、そこに立つて、坂の下から上つて来る伊勢守と一行の者を待っていた。

「おお……奈良はあの森よな。月ヶ瀬は、南の方か。ああ暢のびやかな」

客の一群れは、悠長であつた。坂の途中の曲り角に立ちどまつて、大和やまとの春の昼ひる霞がすみに恍惚こうこつと眼を細めていたり、辺りの老梅の半開の花を愛めでたりして、なかなか上つて来ないのであ

る。

——が、やがて、此方^{こなた}へ足を向けると、伊勢守らしい先なる人

物が、

「あれに佇^{たたず}んでおられるのは御主人であるか」

と、傍^{かたわ}らの柳生家の者に訊ねていた。

宗厳の家臣が、

「左様にござりまする」

と答えると、伊勢守は、非常に恐縮した様子で、やや足を早め、真つすぐに宗厳の前まで来て挨拶した。

「武術修行の遍歴者に、御自身、勿体ないお出迎え、いたみ入ります。てまえが伊勢守秀綱です。——よいお構え、遠方^{おちこち}此方、

思わず眺め入りました」

宗厳も、礼を返した。

そして初めて見る高名な剣人の風貌に眼をそそいだ。

伊勢守秀綱は、永正七年の生れ、その時五十七歳にあたる。

見たところ、至極^{しごく}平凡人である。鄙^{ひな}びた老武士といおうか、素

朴の一語で尽きている。

別段^{けいけい}炯々たる眼光を持つているわけでもないし、骨格もすぐ

れて頑健ともみえない。ただ異^{こと}なっているのは、何となく、接して

いると、春風のような温雅な和気につつまれる。髪はまだ白くな

い。唇の色も齒なみも壮者と変りがない。強^しいて普通人よりすぐ

れているかと思われるところを索^{もと}めればそんな点ぐらいしか、見

出せなかつた。

「どうぞ」

客殿へ招しょうじると、伊勢守は、従者のうちから二人だけを伴つて

座敷へ通つた。

座についてから、その二人を、改めて主あるじに紹介ひきあわせた。

「こちらは、門人鈴木意伯いはくと申す者。——また、これにおるのも、

弟子の疋田文五郎ひつたでござる」

その後から、

「よろしく」

と、兩人が手をつかえた。

意伯はすでに老人であり、文五郎は、元服して間もないくらい

な若者だつた。

四

いつか、梅の梢こずえに、宵月よいづきが水々しい。
短たんけい繁ひの灯もかすむ宵となつたが、客あるじも主も、
話に飽かないの
であつた。

「剣の御修行へは、いかなる御発心から？」
と、伊勢守に、その動機を質ただされて、宗厳は、
「道に入りたいために」

と、答えた。

伊勢守は、黙つてうなずいた。

話題を転じて、

「御当家は、天慶以来、武名のきこえある武門でおわすゆえ、定めし御先祖のうちには、兵法に心を潜^{ひそ}めたお方もおわそうな」

「特に、劍を学んだという者はございませぬ。——祖父のはなしに聞き覚えておりますことには、応仁の頃、柳生孫次郎家宗^{いえむね}と申すのが、強^{ごうきゆう}弓をよく引きました由で、その頃、奈良坂八町を射通し、世間に伝えられましたため、弓の柳生よ、弓の家よ、と云われていたようでござった」

「ホ。然らば、弓にかけて、名誉なお家だの」

「祖父も、亡父^{ちち}も、そのせいか弓術は人なみに致したようです」

「では、剣に心を向けられたのは、御当主が初めてといえますな」

「少年の頃、筒井家に人質ひとじちとしていたことがあります。その折、

筒井家の客となっていた神取新十郎かんどりという剣者と知りあい、後、

当城へ招いて、数年のあいだ新当流を学び、その奥旨おうしを授かりま

したが——なぜか自身、どうしても、満足ができません。分け入

れば分け入るほど、踏み迷うばかりです。己おのれの未熟と不才がわか

ってくるばかりで、お恥かしゆうぞんじます」

「神取新十郎は、五畿内きない随一の兵法者。その人から、新当流の奥

旨をうけられながら、なお御不足かの」

「生れつきの鈍才どんさいとみえまする」

「ははは。御謙遜ごけんそんであろう」

「いや、まったく」

我れ知らず、宗嚴は、斬り込むような語気で云った。

必死に道を求める者の懸命なさけびが、つい迸^{ほとばし}つて、眸からも

燃え出たのである。

今だ。この人にこそ、日頃の懷疑^{かいぎ}を質^{ただ}し、悶^{もだ}えを打明けてみよう。そして、礼を篤^{あつ}うして師事してもよい。

——この心の眼さえあくならば！

宗嚴の胸には、さつきから、そうした熱情が抑えられていたの
で、我れにもあらず膝をすすめたのであった。

ところが。

伊勢守は、とたんに手の杯を、軽く下において、

「思わず長座を。……文五郎、意伯、おいとま致そうか」

と、さり気なく反^そらして、宗厳の眸が、何を訴えているかも見てくれない。

「せめて一夜」

と、留めてみたが、伊勢守は、春の夜道も好ましいゆえ、帰るという。

宗厳は、心残りでならなかったが、家臣三名に松^{たいまつ}明を持たせて、ここから奈良まで二里足らずの道を、送って行くようにいつけた。

惜しい。実に惜しい。

つまらない座談に千載せんざいの好機を逸してしまった。

何ものかを、あの人から学ぶべきであつた。

客の歸つた後で、宗嚴むねとしは、寝もやらずそんな悔くいをくり返していたが、また、

（案外、平凡な人物でもある）

と云う考えもわいて来た。

世間の大家とか達人とかのうちには、ずいぶんまやかし者も多い。禪ぜんをやつてみて、禪門の名僧智識などに見参してみても、よくそういう失望に会う。

得態えたいのしれない公案や一喝かつをくれて取り澄ましていられると、

(これは抑そも、真ほんものなりや、偽にせものなりや)

ちよつと惑まどわさせられる。

何ぞ知らん、ただの交際つきあいになつてみると、ただの俗人以上の

何ものでもなかったりする。いや俗衆以下の場合さえ往々にある。

書にも画えにも陶器や仏像にさえ偽物ぎふつは世上に横行しているのだ。

いわんや人間にあつて不思議はない。

彼が騙あざむくのではなく、こちらの眼が曇っている罪ともいえよう。

——真を観るむずかしさ。直指人心。これができれば、もう或る所までその人間は達している。

「はてな？」

宗嚴は、疑いだした。

宝蔵院の和尚おしょうにしても、ああ極言して賞めほちぎったが、道に

おいて、あの和尚と自分と境地は、大差はない。

「真価はわからぬ。よし、もう一度、こちらから出向いて会ってみよう。そのうえで、伊勢守の人物が、名声の如く、高潔であり、彼の劍に学ぶものがあつたら、改めて、師礼とを執つても決して遅くない」

もし近日にでも、先へ旅立たれてはと惧おそれて、それから一日措おいてすぐ、柳生宗嚴はただひとりで城を出た。

ここに久しく、絶えて何処へも出ない主人が、遽にわかに、

「奈良まで」

と、城戸きどへ向つて行つたので、家臣の庄田喜兵衛次きへえじ、服部おりべ織のすけ部介などが大手の坂まで追いかけて、

「どちらへお出ましますか」

と、顔いろを覗のぞいた。

「宝蔵院まで参る。供はいらぬ。供に従つくな」

「でも、お馬の口輪など」

「いや歩いてゆく」

家臣たちは、茫然と見送つていた。

それほど、宗厳の姿は、道を求めるうつつな人であつた。

彼の学んだ新当流の剣といわず、この時代のいわゆる刀法は、

まだ極めて、技術も理論も粗あらい——ただいかに人を斬るかの工夫

でしかなかった。

彼の理念は、そんな粗雑な構成の熟達^{じゆくたつ}で甘んじられなかった。

いちど、劍を離れて、禪に入ったのも、そのためだった。

けれども、混沌^{こんとん}と、迷いに入るばかりだった。禪は禪、技^{わざ}は

技^{わざ}、ばらばらである。自己の一体に溶けて一つの力となつて生命の泉を滾々^{こんこん}と音立てて湧かして来ない。——むしろその技^{わざ}すら徒^{いたずら}に伸びなくなるばかりだった。

「……………」

黙々と、村を通ると、村の人々は争つて、路傍に屈^{かが}んだ。野を通れば、野の百姓たちは、土に坐つて、彼の姿に礼をした。

「みな父の遺徳、祖先の恩沢だ。……わしはまだわしとして、真に、領民から土下座をうけるほどな何事も為していない」

彼はむしろ恥かしかつた。

しかも彼のすがたは、よほど年老つた百姓でなければ、

「御領主様……」

とは囁かなかつた。実に、質素な身なりであつた。木綿と藁わらぞ草履うりと、一がいの笠しか飾っていない。

やがて、宝蔵院の寺内へかかつた。

ここの寺も、住持が変り者なので、ひどく虚飾きよしよくがない。がらんとした巨大な空洞のようである。

青銅の訪鉦ほうしやうが下がっている。備えつけの撞木しゆもくでたたく。

「おうっ」

と、井戸の底から答えるように、黒衣の坊主がのしのしと出てくる。この僧も、柳生の城主の顔を知らない。

突っ立ったまま、見下ろして訊ねた。

「誰だ。武者修行か。……近国の郷士か」

求道の門

「——いや、遊歴の者ではない。自分は柳生宗むねとし厳でござる。胤い栄んえいどの在院なればお目にかかりたいが」

取次の法師の無礼を咎とがめないのでのみか、宗厳は、丁寧ていねいすぎるくらい、慇懃いんぎんに云った。

しかも彼の気持は、極めて自然であつた。

これへ来るまでのあいだに、宗厳の心は、自分が柳生城の主あるじであるというような日頃の習慣や気位きぐらいはとうに振りすてていた。

道を求めて熄やまないものだけが胸を占めていた。同時に身は出家にひとしい謙虚けんきょになっていた。

「あつ、宗厳様で」

突つ立っていた法師は、あわてて畏かしこまった。知らぬがための非礼をくどく詫びて、舞い込むように奥へかくれた。

「どうなされたのです」

代つて、胤栄が笑いながら姿を見せた。親しいうちにも、貴人を迎える如く鄭てい重ちゆうに、自身案内に立つて、宝蔵院の一間に招じた。

「寔まことに唐突とうとつだが、当寺の客、伊勢守どのには、まだ御逗留であろうか」

「御滞在でござるが、何か……？」

「されば、貴僧を通じて、お願いの儀があつて参つたが」

「先日、伊勢どのから足を運ばれて、もう御昵懇ごじつこんのあいだだか

ら、何も御遠慮には及びますまい。——御自身、おはなしなされてはどうです」

「いや一応、御内意を質^{ただ}して欲しい」

「よほど何か重大な儀でも」

「されば。この宗厳にとって、生死に^{かか}関わる問題です」

「生死に」

動じない胤栄も、すこし眼をみはった。

長い交友なので、宗厳の人がらはよく知っている。かりそめにも^{げんき}銜気や大袈裟を^{おおげさ}云わない人である。その宗厳がきようは沈痛な^{おも}面もちで、

——生死の問題

と云ったので、胤栄も驚いたのである。

「ほかの儀ではないが」

と、宗嚴は、伊勢守に出会つて後、またその前から抱いていた苦悶を、何の見得みえもなく打明けた。

「――要するに、自分は自分に対して、日頃から不満でならない。未熟を知っている。多分な疑いを抱いている。まだ一日として、これでよいと、自分で安んじたことはない」

宗嚴は、云うのであった。

「しかし人は、この身をさして、新当流の奥儀おうぎに達した者とかいう。畿内第一きないの劍であるなどとも噂する。いよいよもつて恥かしい。何ぞ知ろうわし自身は、ここ数年前から、殆ど、壁に頭を打

ちつけたように、道も悟れず、わざ技も進まず、ただ昏迷があるばかりだ。時にはつかれ、時には諦めあきらの嘆息が出て、剣も捨ててしまいたくなる。——かくまで喘ぎあえつめてきた剣の道、それはもうわしの生命だ、それを捨てて、宗巖の生はない」

「……………」

胤榮いんえいは耳をすましていた。

時には、怪しむように、宗巖おもての面を凝視したが、また、頷うなずいては聞き入った。

道を求める熾烈しれつな人のすがたは、路傍の眼から見れば、狂人かと疑われさえするものである。しかし宝蔵院胤榮には解る。胤榮も道の人である。同情せずにはいられなかった。

「それにしても、余りな御卑下^{ごひげ}。いかに自省のお強い性質とはいえ」

と、彼は心のうちで呟いた。

宗嚴は、ことばを続けて、

「つい、他事^{よそごと}のみ申し上げたが、そうした自分の衷^{ちゆうしん}心です。

……実は一昨日、伊勢守どのに拝顔の折、よほどお打明けて、と存じたが、貴僧にこう申すようには云えぬのでござった。――

小城ではあるが、柳生ノ庄^{あるじ}の主として、あの城に坐しておることが、もういけないのです。今日は改めて、ただ一介の修行中の者として出直して来た次第。願わくば伊勢守どのへお通じ下されて、ひと手、御指南にあずかり申したい」

と、云った。彼は、そう云い終ると、胤栄に対して、両手をついた。

二

渡り縁をこえた宝蔵坊の一棟に、上泉伊勢守は、もうだいぶ長いこと逗とうりゆう留りゆうしている。

甥おいの疋田文五郎と、高弟の鈴木意伯いはくをつれて、今、裏門のほうからそこへ歸つて来た。

「御見物でございましたか」

「おう、御住職か。あまり麗うららかさに、春日かすがの御社みやしろまで詣まいつて

来た」

「実は、お待ちしているお方がございます」

「どなたかの」

「柳生殿でござります」

「何、宗^{むねとし}厳どのが。……それはまた思わぬ失礼を。いざ、お迎

え下さい」

「いや、きょうのお越しは、そうした徒^{つれづれ}然のお訪ねではなく、

実は必死なお気もちでお出でなされました」

「必死とな」

「実は、かような次第です」

胤^{いんえい}栄は、板縁へ坐ったまま、宗厳の気もちと望みとを、つぶ

さに話した。

伊勢守は、縁の陽^ひなたに腰かけたまま、聞いていた。いつのまにか、眼をふさいでいる。やがて、その眼をひらいて、胤栄を振向くと云った。

「近ごろ殊勝な人に出会った。いかにもお望みにまかせよう。：しかし此方^{こちら}が観た眼も、世間のうわさに違^{たが}わず、すでに柳生殿には、一流に達しておられるお方、この伊勢守に御指南するほどの力があるや否や疑わしいゆえ、仕合とあれば、承知いたしたとお告げ下さい」

「ありがとうございます」

胤栄は、静かに、退^さがって行つた。

しばらくすると、再び姿を見せて、

「御斟酌ごしんしゃくの儀、柳生殿にも、御承知のうえで、先へ、道場へ通つてお待ちなされております。おさしつかえなくば」

胤栄が、促すと、

「おう、すぐ参ろう」と腰を上げながら、伊勢守は、意伯と文五郎を振向いて云いのこした。

「明日あすは、当寺をお暇いとまする。そち達はこれにおつて、何かと旅たびご行李うりの物など、取りまとめておくがよい」

伊勢守が立つと、胤栄は長い廊下を導きながら、今のことばを質ただした。

「どうしても明日あすは、御発足でございますかな」

「はからず長いことお世話になった」

「奈良から何処いずこへおまわりですか」

「四国をへ経、九州へ渡ろうと思う」

「何やらお名残惜しいことで」

云ううちに、もう道場の床が見えた。寺院造りの太い丸柱のある広床は、講堂と云ったほうがよいかも知れぬ。

南都宝蔵坊の檜の道場といえは有名である。現住持の覚かく禅ぜん法ほう師し胤いん栄えいのうだい槍も共に宇内うだいに鳴っている。後に新井白石が本朝軍器考しるに誌しるすところの鎌かま槍やり——素槍に鎌を付けた工夫は、胤栄が晩年の発現といわれているから、伊勢守が同寺を訪れた頃は、まだそういう特色までは持っていなかったのであろう。

けれど毎日のように、ここの床を訪れて来る遠来の修行者と在住の法師たちとの間で、激しい仕合が行われていた。南都の僧そうぞ俗くにも稽古けいこをうけに通つて来る者が多かつた。

つい先刻までは、その人々の鋭い気合だの、床を踏み鳴らす響きがしていたが、今来てみると、みな追い返したのか、寂せきとして人影もない、また足あしあぶら脂さに磨かれた広い板敷のどかにも、塵ちりひとつ見えず、ただ何処からか映さす春の陽が長閑のどかに斜影しゃえいをながしている。「お。これは」

伊勢守は、そこにただひとりで坐っている宗嚴のすがたを見ると、自分もひたと坐つて、礼儀をした。

宗嚴も、遠くから頭をさげた。

軽い挨拶がすむと、上泉伊勢守から起つて、物腰しずかに、

「では」

と、支度をうながした。

三

木劍ぼっけんと木劍である。木劍はすでに真劍しんけんにひとしい。それが仕合を約して立ち対むかつた際はなおそうである。打ち所が悪ければ死にもする。腕を折られ、脚を挫くじき、生涯の不具者となる例などはめずらしくない。

危険に対して何ら約束のない仕合。それがその頃の仕合だった。

「……………」

伊勢守は、まず宗むねとし嚴が、どの程度に、身を捨ててかかっているか。それを木劍のさきから観あるじるような眼まなざしであった。

かりそめにも宗嚴は一城の主である。多くの眷けんぞく族も養っている当主だ。必死と口にはいうものの、どれほどに、その身分や俗念が捨てきれているか？

「……これは」

伊勢守のひとみが革あらたまった。

彼は宗嚴を、自分の想像していた以上に見直したらしい。きょうは生死の問題だと云ったという、最前胤いんえい栄から聞いたことばを思い出して、

「さもありうか」

と、うなずいた。

動かない。

一方は山の如く、一方は水のように、木剣と木剣とは、ひそと
したまま動かないのである。

ただ刻々と、宗嚴の形ぎようそう相が蒼白く硬こわばつて来た。毛髪あへのす
べてが氣息に喘あへぎ出したように見える。

宗嚴はそうした丹田たんてんのそこで、

「何ほどのことが」

と、気をもつて、まず伊勢守を圧しようとした。

彼は無数の剣者を、きょううまでは、およそその気をもつて圧伏

し得た。劍はその後に加える勝利の形を取るものにすぎなかった。

——が、きような相手は、如何いかんともすることができなかつた。

まるで無反応な存在である。山へ向つて声を張るように、氣ばかり渴かれてしまふのだつた。

「彼も人！ われも人！」

肚はらの底で喚いてみた。が、そんな空しい相対性の觀念を奮ふるつて

みても何のかいもない。いたずらに毛の根が汗ばむばかりだつた。

猛もうしゆう驚かかが蒐かかるように、宗嚴はいきなり跳びついた。理念をふ

み超えた一瞬の捨身である。床板が踏み抜けるように鳴つた。ふ

たつの体のうごきが一渦うずの旋風せんふうとも見えたせつな、

——戛かつつ。ぱツん！

二断だんに異様なひびきがした。

宗厳の木剣は打落されていたのである。

そして宗厳は、茫然ぼうぜんと立っていた。

「おそれいました」

坐つて、両手をつかえると、しばらくは胸を正せなかった。肩で大きく息をしていた。

伊勢守も静かに坐つて、

「失礼いたしました」

心もちにこやかに顔を和なごませて云う。宗厳は、その変らないすがたを仰ぐと、心の底から、

「無念な」

と、思った。

敵に怨みをふくむような小さい歪ゆがんだ憤ふんねん念ではない。自分の未熟みじゆくに対する憤いきどおりだった。

——彼も人、われも人。

と思い較くらぶるところから沸わく無念である。自分へ責めそそぐ悲涙であつた。

四

「席を改めて、お詫び申そう。何かと、一昨日おとといのお名残もござれば」

伊勢守が起つと、胤栄も、惨^{さん}たる面持^{おももち}して、気の毒そうに、

「いかがですか。奥へお越しになつて、御悠^{ごゆう}りと遊ばしませぬか」と、云い添^そえた。

さし俯^{うつむ}向^むいていた宗^{むねとし}厳^いは、

「いや、きようはこれでお暇^{いとま}いたしたい。ただ上^{かみいずみ}泉^{いづみ}殿へお願いがござる。明日またお訪ね申しますゆえ、もう一度、お仕合くださいますまいか」

「折角のお望みなながら、明日は早、当寺を辞して、旅の先へ立つつもりですが」

「えつ、明日、御出発とな……」

落胆^{がっかり}したように、宗厳は云つたが、では早^{そうぎ}暁^{よう}にでも出直

して来るゆえ、ぜひぜひ、出立の間際でも、もう一度、仕合ってもらいたいと口を極めて頼んだ。

「それまでに仰せあるものを、無碍むげにお別れもなるまい。然らば左様に早朝でなくても、お待ち申していきましょう」

伊勢守は、約束を承諾してくれた。

「どうして敗れた」

宗厳は、一夜を工夫に凝こらして、次の日また柳生ノ庄から宝蔵坊まで歩いた。

そして望みどおり立合ったが、殆どきのうと同じような負け方をした。

どう思ったか、伊勢守は、どうせのこと、もう一日滞在を延ば

そうから、明日あすさらに一回、仕合してみようと、彼の方から云つた。

「願うてもないこと」

と、宗巖は次の日は、さらに、思念に思念を凝こらし、彼の前に立つた。

ところが、その三回目の勝負も、無残に敗北してしまった。

しかも三日が三日とも、同じ負け方もとの下に敗れたのである。心外も無念も二日目までだった。最後の一敗をうけた時は、かえつて何か痛烈な爽快さを覚えた。

「この人に敗れたのは当然だ」

伊勢守に対する欽きんぎよう仰ようの念が、彼の小我や妄もうねん念のすべてを

解決したのである。――いさぎよ潔く、彼は伊勢守に入門を乞うた。

「お心根を見とどけた。ふしよう不肖ながらお手を取って進ぜよう」

伊勢守は、九州へ立つ日取を遽にわかに変更して、柳生城へ臨んだ。

柳生城では、元より師として、朝夕の礼をうけ、本丸の一棟に住んでいた。後に、彼の起臥きぎの跡というので「新陰堂しんいんどう」と名づけられた建物である。

春の頃から秋まで、およそ半年の滞在だった。

その間に、疋田文五郎ひつたは、暇をもらって、ひとり廻国に出た。

後に疋田陰流を創始して、栖雲齋せいうんさいと号し、伊勢守の門を出た者として、また伊勢守の甥おいとしても、名を辱めはづかしなかった。

宗厳も、刻苦した。

「長い御縁の望まれぬ師」

と思えば、なおさら、伊勢守の一言半句も、一挙一動も、あだには接していられなかった。

五

朝、昼、夜、時も選ばず師事し研鑽けんさんした。また伊勢守もまた、訓えを惜おしまなかつた。

天地に秋の声を聴くと、一日、伊勢守は宗むね厳とを室へやに招いて、「もうよいでしょう。お別れしたい」と、云つた。

そして、別れるに臨んで、最後のことばとして訓えた。

「宝蔵坊へ三日お通いになって三日ともあなたが敗れた。その以後も、ただの一回も、この伊勢守に、あなたの木劍が触れたということはない。……これは何故か。お考えつかれたか」

「わかりません。ただ到らざるを知るだけです。——それは理法に依りましようや、技わざに依りましようか」

「理も技も超こえたものです。理と考えれば、理念にとらわれ、技と考えれば、体にとらわれる。いったい人間の真体というものはそれ二つしかないものでしょうか。……否とはすぐにお気づきになろう。然らば、理にあらず、技にもあらぬ体は何か」

「……………」

「実はこの」

伊勢守の語氣も熱した。

「こうは申しながら、此方こち自身もまだ、容易にその会得えとくはなり難かねておる。ただ伊勢守として、信念いたしておるところは、無刀、その二字が極意です」

「無刀。——無刀の極意とは」

「医術の究きゆうめい明は、医術の無用になることを以て目標とし、法令の要旨は、法令の無き世を創たつるにあり、兵馬の理想は、兵馬なき平和を招来するにある。——劍は、殺人をもつて大願とせず、劍はまた、劍を帶おぶるがために、劍禍けんかにも会あう」

宗嚴は、頭を垂れて、心に銘じていた。

「なぜ、あなたは、この伊勢守にどうしても勝てないか。理は簡単である。あなたは劍を持つてかかる。常に常に、劍に恃^{たの}み劍に迷い劍に執着しておられる。それに反して、伊勢守はとくより劍を捨てておる。劍は持てど、劍に恃^{たの}まず、劍に妄^{もうしゆう}執せず、無刀の心をもつて、体としておる。……いや理も体も超え、劍をすらあるとも思わず対しているのです」

「……あつ」

微^{かす}かに、声を放つて、宗嚴はそれと共に、眸^{ひとみ}をあげた。

師と自分との、今までの距離が、心態の相違が、はつきりと心に見えた眸であつた。

伊勢守は、なお語をつづけて、

「——が、それにしても、此方このほうの申したことは、多年の体験と感か得んどくからつかみ得た単純な道理にすぎない。まだ、その理法を明らかにし、それを基本として一流の兵法を構成するまでには至っていない。それがしはすでに老年のこと、あなたはなお春秋に富む身、どうかそれを研けん鑽さんし、完成して、あなた独自の一流おこを興おこして下さい。——そこを闡せん明めいして天下を益えきしてくれるほどな人は、御身を措おいて他にはない。伊勢守は、実は非常なよろこびを以て、この半はん歳としを送っていたのでござる。——わたくしからかくの通りお願いする」

伊勢守は、そう告げ終ると、門人たる宗厳へ、心から頭をさげた。

「三年後に、もう一度、お訪ねする」

次の日。

伊勢守はそう約束して立った。中国から九州路への遊歴に。

「三年後の仕合には」

と、宗巖は、ひそかに自分へも誓った。そのあいだの彼のすさまじい修行の辛苦と克己こつぎとはいうまでもない。彼の位置が、何不自由ない一城の主あるじの身であるだけに、その苦しみは、自ら求めて苦しまなければ、享うけられない苦しみだった。

苦しみのない修行などはありません。

苦しみに迫られて、やむを得ずする苦しみと、進んで苦しみを求める心とは、大きな相違がある。

彼は、それに克^かった。

永禄八年の初夏、伊勢守がふたたび訪れた時、それは実証された。

「こうもお違いになったか」

伊勢守は嘆^{たん}賞^{しょう}して、

「おそらく、自分の眼界では、今はあなたに勝^{まさ}る人はあるまい。

天下無双の剣といってもよいでしょう。爾^{じこん}今は、あなた独自の一流をもつて柳生流と称されるがよい」

と、云った。

同時に、一国一人に限るとしてある新陰流の正統の印可と共に、伊勢守が旅すがら描いた絵^え目録^{もくろく}をも添えて授けた。

絵目録の末巻には、伊勢守が筆をとつて、その旨^{むね}を誌^{しる}し、永禄八年卯月の月日をも追記した。

石のふね

一

天はふたつを与えない。

彼の十数年にも互^{わた}る刻苦精神^{こつく}が実^みをむすんで、心、体、理の基

本を一系に統合し、ここに、柳生新陰流——なるものの大

成もほぼ完まっとうされたかと思われる頃、

「ああ。世も変った」

と、大和の一角から天下の推移すいに眼をうつすと、思い半なかばに過ぐるものがあつた。

彼が一度は扶持ふちをうけて合力ごうりきもした松永久秀は亡び、続いて、

足利義昭よしあきも滅亡を遂げている。さらに、それらの旧勢力を一掃

して、革新陣の先頭にあつた織田信長も、本能寺一夜の兵燹へいせん裡に歿し去っている。

「いや、変つたのは、世の中ばかりではなかった……」

今さらのように、宗嚴むねとしは、自分の身のまわりを顧みた。

住居すまいは、依然として、柳生ノ庄の元の位置にあつたが、彼の所

領は、もう彼の手を離れて、領主の名は變つていた。

一家一族は、ここ数年、禄ろくを離れ、放浪せざる牢人ろうにんの境遇であつた。

「これで三度か」

宗嚴は苦笑して、自ら嘲あざけつた。

筒井順昭じゅんしょうに敗やぶれた時、一度、領地を失い、足利家没落と共に、二度、所領を没収された。

その後、大和に在りながら、九州の大友宗麟そうりんに属して、金子きんすで三千石の扶持ふちを送られてたが、その大友家が島津氏に侵略されてからは、仕送りも途断えていた。

のみならず、わずかな衣食の糧^{かて}と恃^{たの}む所領も、大和大納言秀長がこの地に来てから没収されて、まったく無領の一郷土にまで成下がってしまったのである。——幸いにも、祖先以来の砦^{とりで}の山は、邸内といえるので、藪^{やぶ}を伐^きり林^{ひら}を拓いて、家族召使もみな鋤^{すき}鋤^{くわ}を持ち、自分で耕して自分で喰^くう——自給自足を辛^{から}くも生活として今をしのいでいる有様であつた。

「思えば気の毒な——」

と、宗厳は、わが身を憐^{あわ}れむより、まず家族が慍^{あわ}れまれた。家族を慍^{あわ}れむよりは、多くの家士を不慍^{ふびん}に思つた。

三度も領地を失っているのです、その間に、自^{おの}ら^ず家臣も減り、また他へ仕官を求めて去つた家士もあるが、今もなお、

「御主君が鋏くわを持つなら鋏を持って。御主君が肥桶こえおけをかつぐなら自分らも肥桶をかつぎ。——たとえば、稗ひえを喰つても！」

と、踏み止まっている家中も多いのである。そうした不平も鳴らさない家士たちを見ると、宗厳は眼を熱くして、

「——何の徳もない自分に」

と、主人たる自分の不才が、独り責められもして、

「済まない」

と、心のうちで掌てをあわせた。

慶長元年。

ことし柳生せきしゅう 石舟うさい 斎宗むねとし 宗厳は、六十八歳。

わが鬢びんぱつ 髪はつの霜に気づいて、彼が見まわした彼の境遇はそんな

中にあつたのである。

兵法の舵かじをとりても

世のなみを

渡りかねたる

石の舟かも

処世の如才じよさいに欠けている自分の——いわゆる世渡り下手を啣かこつて、彼はこんな歌を詠んだ。

石舟斎という号も、おそらくはそんな自嘲をもって——或いは超然たる自負心をもって、——その時代から自身の称としたのであるまいか。自分の愚を、浮かぬ石舟となぞらえて、自嘲した和歌の作はもう一首みえる。

兵法は

沈みてあるぞ尊とうとけれ

千代のながれに

朽くちぬ石ふね

二

七月。山城の国を中心に、大地震があつた。

伏見の都市は、もつとも被害が多かつたので、伏見の大地震といわれている。

もちろん大和やまとも相当に震ゆれた。

七、八百年も前から祖先代々住み古している柳生城の石垣なども、至るところ崩壊^{ほうかい}して、土の肌をむき出していた。

農家も傾^{かし}いでいる屋根が多い。秋も近く、百姓はたださえ忙しいのに、各 《めいめい》の家のことも措^おいて、

「お陣屋の石垣から先に」

と、その修築に集まって来た。

領主の資格がなくなつてからでも、柳生城の周り^{まわ}の百姓たちは、石舟斎を見かけると、

「御領主さまが」

と、単なる口ぐせではなく、心からなついて、以前と少しも変わるふうが見えなかった。

石舟斎も、子どもや孫どもを従えて、自身、諸所の崖くずれや
 仆れた門の修築を指図し、また自身手をくだして、泥まみれに働
 いていた。

「お年をめした大殿様が、わしらの手で足る土仕事を、あのよう
 にまでなされないでも」

と、百姓たちは、家士を通じて、幾たびも、石舟斎が草鞋など
 召さないようにと願ったが、石舟斎は笑って、

「とんでもないことだ、それは百姓どもへ対して、わしの方から
 申すことばだ。百姓たちは、田にあつて働ければ、五穀を産む手
 をもつておるのに、その暇をつぶして、わしの如き、無禄の隠士
 の住居を繕すに集まつて来てくれる。——勿体ないことであ

る。何で、わしが安閑^{あんかん}としていてよいものか」

そう云つて、

「孫よ。土を担^{かつ}げ。——土を担ぐも兵法であるぞ。——五郎右衛門と宗矩^{むねのり}とは、その石垣の崩れに石を積みめ。——石を積むは、智を積むのだぞ、智を積むのは、手でないぞ、頭で積むのだぞ」

と、従えている子息や孫たちを指揮し、その労働のあいだにも、何ものか、学ぶものを得させようとして訓^{おし}えていた。

家士も日頃から百姓仕事には馴^なれている。主従は一体となつて汗と土にまみれ、明るい初秋の陽の下^{もと}に、勇壮な鍬の音、土の音などが、掛声の中に揚^あがっていた。

ばらばらつと、大手の坂の下から、やはり野良仕度^{のらじたく}の家士のひ

とりが駈け上つて来て、

「甲斐守様かいのかみがお越しになりました。——黒田甲斐守様が、ほん

のお身軽で」

と、あわただしく告げた。

石舟斎は、鍬くわの柄えを立てて、

「なに、長政ながまさ殿が」

と、坂下へ目をやった。

馬を家臣の手にあずけ、ただ一名で、もうこれへ登つて来る人が見える。黒田甲斐守長政の姿であつた。

長政は、黒田如水じよすいの嫡男ちやくなんであつた。

彼はまだ若い。しかし父官兵衛孝高よしたかが早くも薙髪ちはつして、その封土ぶぜん豊前十六万石の家督を譲っているのです、長政は若くしてすでに一城あるじの主であり、京大坂にあつては、錚々そうそうたる若手の武将だつた。

「やあ、老先生。えらい姿でお働きですな。この辺の地震の被害も、思ったより大きいので、道々、驚いて参りました」

長政は、師礼を執とつて、石舟斎の前に、こう挨拶した。

石舟斎は、木陰の床几しょうぎへ、彼を招じ、自分も一憩ひとやすみと腰かけて、

「いつもお身軽ではあるが、今日はまた、何事で？」

と、来意をたずねた。

双方、気軽な応対のうちに、親しみがある、情味が見える。石舟斎は、長政の恩師であり、長政は、石舟斎の愛弟子^{まな}だった。

多年、劍の究明に没入して、世事をかえりみなかつたために、石舟斎は領地をも失ったが、その代りに心には不動の光明を点じ、周囲にはいつとなく有為^{ゆうい}な弟子が多く集まっていた。

長政もその一人だった。父の如水と石舟斎とは茶禪の相識であつた関係から、もつとも早く入門して、在京中は月に幾度となく騎馬でこの山莊まで通つて来て、技^{わざ}を磨^{みが}き、道をたずね、心法の鍛錬^{たんれん}をうけていた。

「いや実は、老先生を世の中へ引出す大役を帯びて、徳川殿にも、必ずお連れして参ると、堅い約束をして罷り越したわけです。――老先生、長政がお供^{つかまつ}仕ります。枉^まげて、一度お会い下さい」

「誰とな？」

「徳川殿と」

「家康公へお目にかかって、どういふはなしをせいと仰せか」

「いえ、ただ一度会いたいと御意^{ぎよい}されておるだけのことです」

「天下多事の際、徳川殿ともあろう忙しいお方が」

「何の、多事なればこそです。――世は挙げて、老先生のような人材を求めている秋^{とき}なのです」

「石の舟は石の舟、不器用が生れ性だ。沈んだが最期浮び出る気

もない。——石舟齋には左様な御推挙ごすいきよ無用でござる」

「強しいて御推挙するつもりでもありませんでしたが、自然、武芸のはなしとなれば、老先生のおうわさに及び、長政のみならず、大徳寺の和尚も、その他の人々も、天下の劍道の名人といえ、上泉伊勢守亡なきのちは、柳生の老ろうりゆう龍以外にはないと——これは、吾々が推挙までもなく、世の名声というもので、徳川殿にも夙つとに聞かれておいでなされます」

「……………」

「で。それがしに對し、また父の如水じよすいに對しても、再三ごこんの御懇望もうなのでござる。——ぜひ一度、召連れて参るようにと」

「……………」

「折ふしこの度は、大坂城、聚楽、洛内などの、地震御見舞として、関東より上られ、ここしばらく、京都紫竹村の鷹ヶ峰に、王城御警固の任につかれ、野津の飯屋におられました、いよいよ、近日には関東へお帰りとおつて、一しお御催促が急なのでござりまする。——枉まげて、御苦勞には存じますが、京都までお運び下さいますよう。長政の面目めんぼくも立ちまする。かくの通り、おねがい申しあげます」

「……………」

老龍——柳生谷の老龍——近ごろ誰となく宗むねとし厳の事を世人はそうよんでいる。深淵の潜せんりゆう龍という意味か、蛟こうり龍の池ちにひそむは伸びんがためというところか、とにかくそう称されて

いる彼は、

「……さて」と、口のうちに^{つぶや}呟いたまま、久しい間、秋の空に眼を放ったまま、考えこんでいる面持^{おももち}であつた。

その眼を、ふと地に落すと、そこには土けむりを浴びて、哀れな家士や孫たちが、汗みどろに働いていた。彼の眸は、不愜^{ふびん}にうごかされた。涙を溜^ためないばかりであつた。

ながまさ
「長政どの」

「はっ」

「参ろう。すぐお供申そう」

「えっ。では、お越し下さいますとな」

「ただし、嫡子^{ちやくし}五郎右衛門と宗矩^{むねのり}の両名に、もう一名孫^{まご}の兵

庫利としとし嚴を連れて参りたいが、どうあろうか」

「願うてもないことです。御子息、お孫たちまで、みな老先生をしのぐ俊しゅんさい才と、徳川殿もよくおうわさのことゆえ、お伴つれ立ってあれば、徳川殿にもいっそうお欣よろこびでございましょう」

「では、直すぐにも」と、心を極めると、悠長に構えたり、徒いたずらに勿体ぶっている石舟斎ではなかった。

「おうい。五郎右衛門、宗矩もこれへ来い。……孫はおらぬか、兵庫も呼べ」

と、自身さしまねいて、伴つれてゆく若者たちを、土けむりの群むれの中から呼び出した。

四

「何ですか。父上」

「祖父様。じじさま およびでございます」

名をさされた若者たちは、たちま忽ち彼のの前へ駆けて来て並んだ。どれもこれも土くさい百姓のように日焦やけしているが、さすがにその態度や眼ざしには、老龍の子とも鳳凰ほうおうの雛ひなとも見える気稟きひんを備えていた。

——四男の五郎右衛門が、その時二十八歳。

——五男宗矩むねのりは二十六歳。

そして、孫の兵庫利厳としとしが、まだ十六歳だった。

「支度せい。これよりわしと共に、長政殿の案内で、京都にある徳川公の御陣所まで罷^{まか}り出る。——各、手足を洗うて、厩^{うまや}の馬に鞍^{くら}をつけ、先に坂下の門まで出ておるがよい」

いい渡すと、

「暫時^{ざんじ}、失礼を」

と、石舟斎は、自分も身支度のため、館^{たち}のうちへ入って行つた。

五

彼は、子福者のほうであつた。

由利女^{ゆりじよ}と結婚したのが早かつたせいもあるうが、男女十一人の

子と、三人の孫とがあつた。

だが、現在、男子で健康なのは、四男五郎右衛門と、五男の宗むね矩ねのり、そして孫の兵庫ぐらいしかなかった。

長男新次郎としかつ嚴勝も、衆にすぐれた若者だったが、備前の浮田家に仕え、十六歳の初陣に鉄砲で腰を打たれ、不具の身となつてから、柳生に歸つて引籠ひきこもつたままである。

孫の兵庫は、その子である。

また。

次男は久斎といつて、早くから沙門しゃもんに入り、三男の徳斎も病身で仏門に歸依きえしていた。

「娘どもには苦勞はない。……女子おなごは産み捨て」

と、石舟斎はいつも笑った。その半面には、いかに男の子や孫たちには、彼が人知れず育成の丹精たんせいをこめているか、世に送り出す苦勞をしているか、思いやらるるものがあつた。

「そちたちは、石の舟ではならぬ」

どうかして、晩酌ばんしゃくの室へやに、子や孫たちを集めて、微醉びすいのこ

とばで戯たわむれなどする折、戯れのうちにも、石舟斎は訓おしえていた。

「わしが石の舟となつたのは、わしが生おい立たち頃から近年にいたる

まで、世は乱麻らんまのごとく、武門の道も、生きる道も、洪水こうずいのよ

うな濁流だくりゅうに侵おかされ、正しく道をとろうにも、正しく進めず、

正義にあらうとすれば、滅亡か餓死がししかないような時代であつた

からである。——いわばこの石の舟は、洪水の濁流に、狡ずるく韜とうか

晦^いして来たのじゃ。かくせねば、とうに柳生家そのものは、水泡の如く、亡び去つていたかもしれぬ。……いや七百年來のわが家も、この辺りのすでに亡き土豪の如く、過去の土中へ葬^{ほうむ}られ去つたにちがいない。石の舟なればこそ、貧しくとも、今なお、有る所にこうして有ることができたのじゃ。……柳生城この山に、消えずにあるこの団^{まどい}礪^{とも}の燈火^{しび}は、わしの眼には、むしろ奇蹟とも見える」

そういう述^{じゅつ}懷^{かい}をしたことがある。

宗矩も五郎右衛門も、頭^{こうべ}を垂れて、聞き入っていた。——わけ多感な兵庫利^{とし}嚴^{とし}などは、

「祖父様^{じじ}は、お辛^{つら}かつたでしょう。口惜しいことが、幾度もあつ

たでしようね」

と、幼い胸にも、祖父の忍苦の生涯を思いやって、すすり泣きを始めた。

「兵庫は、たのもしいやつ」

孫は可愛いものという。老龍石舟斎も、眼のうちにも入れた
そうな程、兵庫は愛していた。

しかし、盲愛ではなかった。

兵庫の天稟てんぴんの才を愛したのである。事実、十六歳の兵庫は、
すでに、叔父の五郎右衛門や宗矩をしのぐものがあつた。

とはいえ、その五郎右衛門といい、宗矩といい、おそらく畿内きない
の剣人では、比肩ひけんし得る者はなかった。

「もう何処へ出しても、独り歩きはできる者達よ」

と、石舟斎は、当人にも、他人にも、許してそう語っていた。

——が、世間の真ん中へ連れて行くことは、恐らくその日が初めてといっている。しかも、せきばく征韓せいかんの大役たいえきにかかつてからとみに落陽寂寞せきばくの感ある大坂城の老太閤たいこうに比して、今や次の時代を負う人と目されている徳川家康の前へ出るなど、余りにも、この山の子らには、唐突な曠はれがましきであつたに違いない。

六

「支度はよいか」

一蓋がいの陣笠を手に、老龍はもう身支度をして出て来た。

「祖父様じじ。こちらです、こちらです」

遙はるか、

坂下の大手門のそばで、孫の兵庫が手招きしていた。石舟斎は、自分の早支度をひそかに誇っていたらしいが、

「やつ、もう出おるか、さすがに、若者どもの早さよ。そうなくてはならぬ」

と、負けたのを欣ばしげに、足を早めて降りて行った。馬の口輪は兵庫が把とる。

石舟斎は、それに乗った。二人の子は、徒歩である。

案内役の黒田長政ながまさは、

「どうぞ御子息方にも、お馬に召されますように」

と、謙遜けんそんして、騎馬をすすめたが、

「いや、若い者には鉄脚がある。——いざ参ろう。御案内へ、先へ立たれい」

坂の途中の石垣の土煙はその時熄やんで、秋の大氣は澄んでいた。汗をふき、鍬くわの手を止め、百姓たちは、廬ろを出る老龍と、伴ともなわれてゆく鳳雛ほうすうのすがたとを、見送っていた。——

「ああ、こうしてみると、大殿もお年を召したはず、若様にもお孫様にも、いつしかお立派な骨柄になられた……」

じつと、立ち並んで、目礼を送っている家士たちの眸には、涙があふれかけていた。

一 劍治天下

一

近くつこうの地には、紫むらさき野の大徳寺とか、その他、宿舎として恰か
 好つこうな建物がないではないが、家いえ康やすはわざと鷹たかヶ峰みねの麓ふもとに野陣
 を布しいて、将士と共に野営していた。

こんどの大地震には、御所の築地ついでも大破して、内裏だいりの方々さえ
 幾夜か夜露よつゆの外に明かされたと聞えているほどなので、地震御見

舞として上洛した家康のそうした^{つつし}慎みは、当然でもあつた。

洛内守護の任を果し、併せて^{あわ}伏見城に秀吉の安否を見舞つて、彼は近く関東に帰る予定であつたが、なお、ここに野陣している間も、

「すべて戦時下の心得であること」

を、陣中の法規として、自身も日中は^{もののぐ}物具すら解かなかつた。日盛りの木陰に、軍馬も^{ものう}懶げに^{まぶた}瞼をふさいでいた。蟬^{せみ}しぐれは、耳を^{ろう}聳するばかりである。

「やれやれようやく^{たど}辿り着きました。老先生、どうか駒を降りて、暫時、木陰でお涼みください」

黒田^{ながまさ}長政は、そう云つて、陣門の^{かたわ}傍らに師の馬を曳^ひきよせた。

石舟斎は、鞍くらの上からそつと降りた。従ついて来た四男の五郎右衛門、五男の宗矩むねのり、孫の兵庫の三人は、

「おつかれでございましょう」

と、各、側へ寄つて、老体の石舟斎を劬いたわつた。

長政は、その間に、

「すぐ戻つて参りますから」

と、断つて、陣中へはいつて行つた。もちろん家康へ取次ぐた
めであつた。

間もなく引つ返して来ると、

「どうぞ」

と、改めて、長政は自身、案内役に立つて、柳生家の人々を、

宮内へ導いた。

木陰木陰に幕舎ばくしゃがある。整然とした中にも、将士の笑いさざめきなどが洩れてくる——家康のいる飯屋は、林の小道をだいぶ歩いてからであつた。翠みどりを映して、葵あおいの紋幕が、涼やかにうごいている。

鷹ヶ峰から落ちてくる水音がせんかんと耳を洗う。林間の一茶亭には、釜がかかつていた。その辺りのたたずまいでは、今し方まで、家康の主従と、大徳寺の僧などが、そこで茶を喫きつしていたらしく思える。

「すぐにと、お飯屋の方で、お待ちうけになられていますがお急ぎにはあたりません。それなる清流でゆるゆる汗をお拭ぬぐい遊ば

した上で、お支度もとのえ、それからお目通りなされたがよいでしょう」

長政は、士卒にいいつけて、小桶こおけやら手拭などを、流れの側に運ばせた。

「――何事も其そこもとまか許任せに」

と云わぬばかり、石舟斎はうなずいて、彼のいうがままに、そこで顔の汗あせじお塩あせじおを洗い、手足をそそぎ、刀の筭こうがいを抜いて、孫の兵庫の髪まで撫なでつけてやった。

「祖父様のお鬘まげもすこし直しましょう」

と、兵庫は、筭こうがいを取って、石舟斎のうしろに廻った。

兄の五郎右衛門はまた、弟の袴はかま腰こしをうしろから締め直して

やっている。——こうした些事さじは日常の家庭で繰返している生活の断片にすぎないが、この林間に切離して見ていると、日頃の家風も偲しのばれて、美しくもあり床ゆかしい情景でもあつた。

「お支度はおよろしゅうございますか」

長政も一休みして、物陰から立出て来ると、石舟斎は礼儀ほどこを施して、

「お待ちせいたした。御厄介ごやっかいながら」

と、案内を乞うた。

そしてふと、もう一度、子や孫たちの姿を振顧ふりかえったが、五郎右衛門の顔いろが何となく蒼白あおしろく見えたので、

「そちは昨夜、充分に睡ねむりをとらなかつたとみえるな」

と、訊ねた。

五郎右衛門は、はいと頷うなずいて、

「旅籠はたごの蚤のみや蚊かが気になって、まじまじと眼ばかり冴さえ、明け方になってすこしばかり眠っただけでした」

と、有りのままに答えると、石舟斎は袂たもとから少量の紅べに殻がらをふくませた打粉を取出して、

「貴人の前へ出るに、そのような憔しょうすい悴さいした面おもてをもつて、お目通りに伺うものではない。病者かと御覧ぜられるだけでも御不快であろう。これで程よく頬ほほを刷はいて、不つつかのなきように心を慥し乎かと持てよ」

と、訓おしえた。

二

飯屋と云つても、二の間三の間もある。わけて主室はかなり広い。

涼やかな藺^{いむしろ}筵が敷いてある。大名らしい客が二、三名、ほかに天海とよぶ僧、大徳寺の和尚などが座にあつた。武將は各武装しているが、座談は至極^{しごく}氣らくらしい趣^{おもむき}であつた。

柳生谷に古い豪族ではあるが、今は無禄^{むろく}の郷土^{ごうし}にすぎない。当然、柳生父子は庭^{おやこ}へまわつて、地上に座を占めた。そして奥まつた飯屋の一室に聞える人々の氣配をそれと察して、両手をついて

控えていた。——石舟斎、五郎右衛門、宗矩、兵庫という順に。
 つかつかと奥からあしおと跣音が渡つて来た。簀子縁すのこえんから降りて、
 床几しょうぎを持てとその人はあたりの者にいいつけている。それが家
 康であつた。

「はつ。これへ」

と、近侍きんじが彼のみへ、一つの床几を置くと、家康はなお、腰を
 おろさず、

「老体へもお席をさしあげい」

と、云つた。

近侍は恐縮して、あわててもう一つの床几しょうぎを、石舟斎の方に
 すえた。石舟斎は、

「畏れ多いお扱い」

と、固辞して、容易にそれへ着かなかつた。

彼は、自分を迎える家康の厚い好遇に、年のせい、涙もろい
 瞼まぶたの熱きをまず覚えた。六十八歳の今日まで、世が彼に遇して来
 たものは、白眼か、策謀さくぼうか、利用か、酷薄こくはくか、いずれにして
 もかくの如く温かなものには絶えて遇あつた例ためしがない。

家康の心を酌くむならば。

室には格式のうるさい僧侶や大名などもいるので、無名の一郷ご
 族うでくを、座へ招じることとはできないし、と云つて、長政を使いと
 して、自身から迎えた客なので、礼も執とらねばならない。——そ
 う考えて自分から室を下り、石舟斎にも床几をすすめて、主客対

等に話そうとする心もちが、云わでも、石舟斎にはよく酌み取れたのである。

「老人、遠慮は無用じや、床几へお倚りあれ。室内よりは、この木陰のほうが、むしろ清涼、ゆるりと語り申そう。——長政、老人へ床几をすすめてつかわさぬか」

「はつ。……老先生、あのよう仰せられます。頂戴なされてはいかがでございますか」

「では、おことばに甘えるかの」

石舟斎は、ようやく、起つて腰をうつした。

家康も剣道は学んだ。また、幾多の達人と称する者を見ている。その眼と体験から見れば、石舟斎の何らの覇氣はきも衒氣げんきもない、

淡々たる朴ぼくじゅん醇な風は、これが上泉伊勢守なき後の宇内の名人かと疑われるほどであつた。

が、さすがに家康は、

「これでこそ、真の名人」と、むしろその覇氣のない姿に傾倒した。

「使いをもつて、遠路、老体をわずらわしたが、実を申せば、江戸にある嫡子ちやくし秀忠ひでただに、劍の良師を求めておる。早速であるが、徳川家に隨身ずいしんの意志はないか。それが問いたいのだ。もつとも長政を通じて、先に、余り気のすすまぬようなことは聞いておるが、もいちど、念のために……。どうであるな？」

家康は率直に、求めるところを云い出した。

それに対して、石舟斎は、心から頭をさげた。大きな知己ちぎの言として、感謝の色を満面にあらわして答えた。

「まことに忝かたじけないお言葉にござりますが、この老骨は、すでに御奉公申しても、御奉公のかいなき老朽に過ぎませぬ。また、物事にはやものう懶いくせがつき初そめて、仕官の意志だに燃え立ちません。――が、願わくば、これに連れ参りました二人の男の子と、一名の孫のうちに、万一お眼鑑めがねにかなう者がござりましたら、お取立て下されますように。実は、わたくしの方よりその儀お願いのために、このたびは進んで長政殿の御案内に従ついて来た次第にござりまする」

すでに自分の老い先おさきと命めいを自覚している石舟斎は、この雛ひな鳥どり

の孫や子を如何にもして世に出したいと思つていたに違いない。

今、彼が家康に陳べたことばは、何のかざりも誇言もなく、平凡な頼みに過ぎなかつたが、しかし、その淡なる辞句のうちには慈父の大愛というような切実な情愛がこもつていた。真心は面におもてふれ、やはり愛児の将来を江戸の地にいつも想う家康には、その氣もちが分りすぎるほどよく分つた。

「いや、よく分つた」

家康は大きくうなずいて、

「三名とも、さすがは柳生の子息なり孫なり、いずれもよい面だましいの若者とは見うけるが、して、石舟斎には、この家康が子息への師範として、このうちの誰をかわしへ推挙したいと申す

か」

「所詮しよせん、まだ若年者、御師範などとは、烏漣おこがましゅう思われ
ますが、お相手という程なれば」

「どちらでもよい」

「五男の宗矩むねのりをお召しつれ給われれば、ありがたい仕合せに存じ
まする」

「宗矩をか」

と、家康は、改めて、石舟斎の床几の左に坐っている二人の若
者をながめた。

家康から眼を注がれると、宗矩はハツとしたように頭かしらを下げた。
けれど彼の隣にある兄の五郎右衛門は、ここの木陰のそよ風と、

耳を洗うような快い蟬しぐれの音に、先刻さつきからうつとりとしていたが、いつのまにか居眠りをし始めていた。

また。石舟斎の右側にひかえていた孫の兵庫は、眼をつぶらに見はって、無遠慮に家康の顔ばかり見ているのである。血はひとつの父母から生れても、その性格は三人三様であつた。

三

五郎右衛門の居眠りも、兵庫の無遠慮も、石舟斎は、これがありのままの若者と、許ながしているかのように、咎とがめもしなかつた。家康も、にやにや眺ながめて、敢あえて、それに依つて、石舟斎の驍しつけを

疑おうとしなかった。

「宗矩^{むねのり}は幾歳になるの？」

「二十六歳にございます」

「そちが推挙するからには、この三名のうちでは、宗矩がもつとも道に達しておると認めておるのか」

「いや」すこしあわてて石舟斎が答えた。

「当人を前において申してはいささか不愼^{ふびん}にござりますが、劍の強弱としては、この三名の中で、宗矩がもつとも弱いかと存ぜられます」

「……ふうむ、一番未熟^{みじゆく}というか」

「未熟というおことばは恐れながらちと当りませぬが、弱いこと

は、慥^{たしか}に弱いと申されます。——けれども不肖石舟斎が宗矩に仕込みましたものは、徒^{いたずら}に、強きを能^{のう}とする剣道ではございません。——また、宗矩の性格に、そうした剣は身に持てぬところでもありますので」

「然らば、何をもつて、宗矩は能とするか」

「治^{ちこく}国の剣にございます」

「治^{ちこく}国の剣。……それは初^{はつみみ}耳^{みみ}じゃが、どういう意味か」

「世を治めるの剣。民を愛護し泰^{たいへい}平^{へい}を招来するの經^{けい}世^{せい}の剣にござります」

「剣にもそういう徳があるか」

「術ではなく、道であります故に。——すでに道である以上、聖^せ

いけん
賢のこころ、禪の要諦ようたい、経世の要義、その道のうちにあらぬ
はございません」

「すると、学問だな、まるで」

「学問は理念を基とし、人の知性にのみ多く拠よりますが、剣は、
体得の実相を主として、生死の解決から先にして、ただ実践をも
つて道に入るものです。故に、これを君主が行つて、治国経世ちこくけいせい
に、その理を用いうるにしても、自ら知識から得たそれと、実相
体得から入ったそれとは、現わされる御政道の上に、大きな相違
があるかと考えられます」

「わかった」

家康は、豁然かつぜんと、眼をあげて、梢のあいだの碧い夏空を見入あお

った。

「……そうか。ムム、そうか。いやよく相分った。宗矩むねのりの性質もおおよそその言葉で察せらるる。では宗矩を、今日より江戸の秀忠へ、奉公に差出すこと、異存ないな」

「何とぞ、お伴ともないねがいまする。宗矩、そちも、よう心を定めておろうな」

「はい」宗矩は、明確に答えたが、身に過ぎた大任を、果たして充分に勤められるかどうか、さすがにやや不安ないろを面おもてにかくしきれなかった。

「彼方の茶屋へ来ぬか。……茶などつかわそう。めでたい主従のかため」

家康が床しょうぎ几を立った頃、五郎右衛門は渋そうな眼をあいて、そのくせ、何もかも知っているように、取澄ました顔をしていた。

陽なた竹

一

二十六歳、初めて老父の膝を離れて、彼は「奉公」の生涯にはいった。世の中に立ったのである。

その又右衛門宗矩むねのりが、ちようど三十歳となつた年の六月には、主君家康の軍に従つて、上杉景勝かげかつを討つため、野州小山おやまの陣中に、一旗本として働いていた。

「柳生どの、柳生どの。御主君のお召しであるぞ。急いで——」
近習の一名に麾さしまねかれて、宗矩は、何事かと急いで、家康の幕ば営くえいへ駈けて行つた。

家康は、祐筆ゆうひつに認めしたたさせた自身の書面を、膝においた手に持つて、床几に倚よつていたが、

「宗矩か——」と、彼のすがたへ眼を与えると、手にしていたその書面を授けてから云つた。

「この一書を持つて、そちはすぐに陣を脱し、そちの郷里大和やまとの

柳生谷へ急げ。仔細しさいはこれにある。……ただ老来、久しゅう相会わぬが、石舟斎にも変りないか、くれぐれ身をいたわるように、家康が申したと、よしなに伝えてくれい」

「えっ……では私は、せっかくの御合戦に、お供はかないませぬか」

「何も問うな。ただ急げばよい」

「……でも、上杉攻めの御陣中から、私のみ退去を命じられ、故郷へ帰って参りましたと、何でおめおめ老父に会って申されましよう。身不つつかのため、御陣中に留めおくこと相成らぬとの御ご叱責しっせきなれば、自決して相はてたほうが老父のよろこびと存じまする」

「はははは、疑うはもつともじやが、そち一身にかか関わったことではない。何も申さず立歸つて、石舟斎にみ儂が書面をわたし、そのうえのこととせよ」

宗矩はぜひなく退さがつて、即日、大和へ急やまといだ。――が、その途中、江州ごうしゅうまで来ると、事態の真相がわかつた。

上方かみがたの形勢は一変して險惡を極めていたのである。家康が野州へ向つて手薄となつたのを觀て石田三成、小早川秀秋、浮田中納言、その他の反徳川聯合は、俄然、活潑な行動を起し、この機会に、大坂城以外の関東勢力を一掃せんものと、すでに大きな陣容のうごきが、京、伏見、近江、美濃のぼうだい彪大な地域にわたつて起され、その先鋒はもう関ヶ原の一端に、いわゆる「天下分け目」

のただならぬ氣を孕^{はら}んでいたのだった。

小山陣から歸された者は、ひとり自分だけでないこともわかった。大小名の歸国してゆく者も多い。單身、物の具を携^{たずさ}えて、何処へやら急ぐ藩士や浪人も町に見えた。

「何か、容易ならぬ御書面とみえる。時遅れては——」

と、宗矩は夜を日について馬を励まし、郷里柳生谷へ急ぎに急いだ。

二

鷹^{たか}ヶ峰^{みね}で手放されてから、そのまま父と相会わぬこともすでに

四年ぶりであつた。どんなにお変りになつたろう。いやいや、平^ふ常^{だん}のお心^{こころ}懸^{がけ}、老来いよいよ御壯健かも知れない。

宗矩^{むねのり}の心は、公私二つに惹^ひかれていた。——主君から託された父への書面の内容も気がかりであつた。

「やつ、叔父上ではありませんか」

兄の嚴勝^{としかつ}の子——兵庫はちやうど何処からか歸つて来たところだつた。以前とすこしも変らない小柳生城の坂門の外で、今、馬を降りた宗矩のすがたを見ると、驚いて駈寄^{かけよ}つて来た。

「才才兵庫か、大きゆうなつたな。はや二十二か。むむよい若者ぶり……。思わず見ちがえた」

「叔父上にもお変りになりましたぞ。遅^たくましくおなりになりました。」

祖父様が御覧になつたらどんなにお歡びでございましょう」

「父上は、御健勝か」

「おかわりもなく、近頃は静かに御書見をこの好まれています」

「……ああ、それを聞いて、ひとつは安心。兵庫、先に行つて、お耳に入れい。宗矩が立歸りましたと」

「はいっ」

兵庫は、奥の丸へ、駈込んで行つた。

宗矩は、外曲輪そとぐるわの玄関にかかる。かくと知ると、若殿のお歸

りと伝え合つて、昔ながら仕えている家臣や小者たちが、彼を迎えて、下へも措おかない騒ぎである。

「おう、助九郎も達者か。庄兵衛も髪が白うなつたの。やあ、五

平太もおるか」

懐かしさに包まれながら、家臣たちに笠をあずけ、衣服の埃を
 打たせたり、草鞋の緒など解かせていると、奥からばたばたと駈
 けて来た一家臣が、

「お待ちください！ 大殿からのおいつけでござる！」

父のいいつけと聞き、また、その家臣の口吻にも、何やら峻
 厳なものを感じたので、宗矩は、はっと立って、命を待った。

石舟斎の命を伝えて来たその家臣は、厳しい態度のうちにも、
 気の毒そうな容子を見せて告げた。

「ゆるしなきうちは、草鞋を解いて家に入るとは相成らぬ。用
 談は中門の牆を隔てて聞くであろうから、奥庭の境まで廻れ――

とのお言葉でござりまする」

「かしこまってござる」

むねのり

宗矩は、父の意に従って、解きかけた草鞋の緒を結び直し、庭づたいに、中門のほうへ廻って行つた。

中門の扉は、片扉だけ開いていた。石舟斎は、その内側に立っていた。兵庫のことばでは、お変りもないといったが、四年ぶりに仰いだ宗矩の眼には、世にいう寄る年波の変り方が、余りにもはつきり父のすがたに見られた。

彼は、一目見ると、胸がせまって、あやうくも溢れかけるものあふをまぶた瞼に抑えながら、門の外に坐つて一礼した。

「……宗矩でございまする。むねのりおわかれ申して後は、侍しては大

御所様の御陣に、平素、仕えては江戸表の秀忠様のお側に。――

以後、御奉公に明け暮れもなく過ぎておりましたので、ついぞ御ご膝下しつかへ来て孝養もいたしません、御ぶさたの罪、おゆるし下され
ますように」

彼が、そう云えば云うほど、眼にも見えるほど、老父の面は不
機嫌な色になった。いや、巖いわへ刻きざんだ何なんびと人かの巨像のように、
峻しゅんげん巖いそのものを示すだけで、宗矩が胸にこみあげているよう
な父子の温情らしいものは、その白い眉毛の一すじも見えなかつ
た。

「……宗矩、何しに来た」

やがて老父が四年ぶりの子に對して、初めて云ったことばは、

その一語だった。

「はつ。……申しおくれました。実は、おおごしよいえやすこう大御所家康公の御一書たずさを携えて、おやま小山の陣中から馳はせ参りました」

「では、飛ひきやく脚役か」

「何かは存じませぬが、ただ急いで、柳生へ帰れとのおことばに依つて」

「さてさて、そちも日頃、物の役に立たぬ者と、お眼鑑めがねに見られておるものとみえる。——今は一兵たりと、おろそかにならぬ場合。ただならぬ急な風雲の際。——可あた惜、物の役に立つほどな男なら、御幕下ごばっかより除いて、お飛脚などはお命じあるまいに」

「……面目次第めんぼくしだいもございませぬ。が、何はともあれ、この御書

面を」

ふところ

懷中のそれを取り出して、老父の前へ捧げたが、石舟斎はなお

手も伸べず苦にが々しげに云いかさねた。

「——と云うても、御奉公に出て以来、まだ四年、御用に立つ間

もないは是非もないが、この父に対して、日頃の無沙汰の詫わびな

どは何事か。奉公はどんなものかさえ弁わきまえおらぬか。……すでに、

そちを御奉公にさし上げたその日から、石舟斎は、わしに宗矩と

いう子があるとは思っておらぬ。ただわしが養育して世に出した

一箇の者が、世にあつて、いささかの奉公などしておるかどうか

……それを案じる日はあつたが」

「宗矩の心得ちがいでした。おゆるし下さいまし」

「家康公の御書面を託されて参つたからには、そちは取りも直さず徳川家の使臣ではないか。なぜ、家臣どもにもてなされて、わが家へでも帰つたように嬉々とするか。また、石舟斎のまえに来て、大地になど手をつくか。——主命の何たるものかすら忘れ果てるなど、言語道断」

「……はいっ」

「立て。——あらためて、徳川殿のお使いとして迎えよう。ここは庭口ではあるが、石舟斎が隠居所、略儀はおゆるしあつて、お通りください」

老父は、手ずから、左右の門をひらいて、わが子の使者を、座敷に迎え入れた。

三

家康からの内書には、上方かみがたの急變を告げてあつた。それについて、柳生家もこの際できるかぎりの、兵員を至急ごうりきとのえ、關東軍の出向うまでに、その戦場へ駆けつけて合力するよう――とのことだつた。

石舟斎は、読み終つて、

「内書のお旨むね、慥しかと承知いたしました」

と、宗矩むねのりに答えてから、

「御苦勞であつた。お使いはこれで達した。そなたもお役を果し

た上は、ゆるゆる旅装を解き、皆の者とも会つて来たがよかろう」と、初めて彼を犒^{ねぎら}つた。

その夜、石舟斎は、一族や家臣を呼びあつめて、家康の内書を披露^{ひろう}した。もとより石舟斎自身も、年こそよれ出陣して、曠古^{こうこ}の大戦に加わる意気であつた。

「では、われわれも、こんどの御合戦に加われますか」

心ばかりな酒宴となつて、酌^くみかわす杯のあいだに、人々はどよめき合つた。年久しく用いなかつた髀肉^{ひにく}は疼^{うず}き、淵^{ひそ}に潜^{ひそ}んでただ鍛えるのみだつた腕は鳴つた。

「……時に、この中に、兄の五郎右衛門だけが見えませぬが、如^いか

何^かいたしましたか」

宗矩は、さつきからそれを怪しんでいたが、老人も兄弟も、五郎右衛門については、一言も触れないので、とうとう訊ね出したのである。

父石舟斎に伴われて、鷹ヶ峰の麓で初めて家康に謁した時は——自分と兵庫と、そして兄の五郎右衛門とが、三人してお目見得したものと、宗矩は当時のことも思い合せながら、その姿の见えない座中を見まわして、一抹のさびしさを覚えたのである。

「ムム、五郎右衛門か。……あれについては、家臣のうちでもまだ知らぬ者もあろう。ちようどよい折、語っておこう」

石舟斎はそう云うと、胸の傷むような面持であつたが、実はと——その夜まで公表されていなかった四男五郎右衛門の所在を

うち明けた。

五人の子のうち、ひとり五郎右衛門だけは、さすがの石舟斎も手におえない男だった。型にはまらないというよりは型以上に大きいのだなど日常も自身で豪語ごうごして憚はばらないような人物だった。従つて、この苔こけふかい柳生谷になど壮年までじつと屈していられる性格ではない。早くから家を飛出して、諸国を奔放ほんぽうに遍歴していたが、近頃、何かの手づるがあつて、金吾中納言秀秋の小早川家へ仕えているという噂つるだけが聞えていた。

「ひとりぐらいは、柳生の蔓つるにも、ああいう変質へんなりの瓜もできてよかろう。——宗矩のごときは、余りに南向みなみむきのやぶ竹でありすぎるからの」

話し終つて、石舟斎は、つぶやくようにこう述懐した。

南向きのやぶ竹とは、いったい何の比喩ひゆであろうかと、家臣たちは解けない顔していたが、そう例えられた当の宗矩には、よく分つていたとみえて、面目なげにさし俯向うつむいていた。

幼少の頃、父の石舟斎が、道場に立つて、手ずから子を木劍で打ち鍛えきた、また訓誡するたびによく、

（——陽なたの竹ではだめだぞ！）

と、云つたことを、宗矩は今、思い出すのであつた。

宝蔵院ほうぞういんの胤栄いんえいが、よく尺八を吹くので、その胤栄がある折、尺八のはなしにことよせて、

（御当家もお子達がたくさんであるが、子を育てるには、北向き

の藪竹やぶにしておかねばいけませんな

と、云つたのを、石舟斎がひどく感心して、それ以来、ついでともへも、口ぐせになつて出ることばであつた。

胤栄いんえいが云つた尺八のはなしというのはこうである。彼が、多年の経験に依ると、尺八を作るため、よい竹を探し求め、多年手にかけてみると、結局、地味も肥え、陽あたりもよい南向きの藪に育つた竹からは、一本の名管も生れたためしはない。

それに反して、地は瘦やせ、冬は氷や霜ばししいたらに虐げられ、生れながらの若竹のうちから、蕭しょう々と寒風に苦しめられて育つた北向きの藪からは、勿論、笛にもならない拗すねもの者もできるが、多くの名管はみなそこから生はえた竹にかぎる——という話なのであ

った。

四

「老父のお眼からみれば、なおわしは、陽なたの竹か」

むねのり
宗矩は恥じた。

ことし男子の三十歳ともなつて、徳川家の一麾きか下となり、三千石の知行をうけて、奉公にある身が——と慚愧ざんきせずにはいられなかつた。

また、不孝の大なるものと思つた。

なぜなれば、石舟斎が、そういう胸のうちには、尺八の例もよ

く弁えながら、子を育てる親には、どうしても子を南の藪に育ててしまう——平常の反省と苦慮と愛情とが蟠わだかまっているからである。そして今宵——もう三十になったわが子を見てもなお、心ひそかに、陽なたの竹に育てたという悔くいをにじませている胸を察しると、宗矩は必然に、

「まだどこか、自分が至らないからである。——自分の将来を、なお案じておいでになるからだ」

と、天性の未熟を、自ら責めずにいられなかった。

その宗矩と較くらべると、兄五郎右衛門の素質はまったく反対である。早くから器量は一族にぬきんでて、老父の剣すらひそかに睥いげい睨するの風があつた。が、その兄も、老父の膝下しっかを去っている

のみか、こんどは西軍の一方の雄たる小早川秀秋の陣にある。いうまでもなく、東軍に参加する石舟斎や宗矩とは、敵味方とわかれてまみえることになったのである。

初めて聞かされた家臣は、

「お心のうちはどんなであろう」

と、石舟斎の面を仰ぐのも胸の痛むこころがした。平常は秋霜そうのようにきびしいが、実は、世の親の誰よりも子には甘い煩惱をも一面に持っていることをみなよく知っているからだった。

それから数日の後。

久しくこの古城に聞かなかつた鎧よろいや具足の音が、鏖しょう々しょうと打揃って、陣列をなし、旗さし物や槍の光や馬のいななきと共に、

美濃の戦場へ立つて行つた。

その中に、ことし七十二になる眉雪^{びせつ}の老将が、ひと際^{きわ}、途上に
見送る領民の眼をひいた。

こおりえん
氷の縁

一

九月十九日、関ヶ原の戦端はひらかれた。

宗矩^{むねのり}は、家康に対して、

「父も何分老年ですから、願わくは父に代つて、柳生の手勢をひつさげ、私に先鋒^{せんぽう}の一手をおいつけ賜わりますように」

と、懇願^{こんがん}してゆるされた。

家康がその東軍の大部隊を、野州小山から引返して、三州の池鯉鮒^{ちりふ}にまですすめて来たのを、逸^いはやく宗矩がそこまで出迎へに出た時に——であつた。

大戦が終つて、天下の事は徳川家に帰すと、宗矩もまた論功^{ろんこう}行賞^{こうしょう}にあずかつた。

柳生本領二千石を封ぜられ、すぐ翌年、また一千石の加増をうけた。

そしてそれまでは、単に徳川秀忠の近衆のひとりであり、お相手役にすぎなかったが、以後明らかに、將軍家兵法師範という重職に登用され、たじまのかみ但馬守に任官した。

で、かれは初めて、江戸に一家を興し、おこ江戸柳生家の基礎をたてた。

世に出た子の将来を、そこまで見届けて、石舟斎も初めて、

「……まず、但馬もあれで」

と、安心したらしく見えた。

だが、世に巣立つ幾羽のうちには、悲運に終る子鳥もある。但馬守宗矩の兄——四男の五郎右衛門がそれであつた。

元々、五郎右衛門だけは、幼年から石舟斎の規格にもはまらな

い豪放ごうほうな性質ではあつたが、その後、諸国をあるいているうちに、小早川金吾秀秋の家に仕えていると、風の便りに聞えていた。関ヶ原の陣中にもいたであろう。一時は、徳川家と対陣した西軍のなかに。——戦いくさの半ばからは味方の石田三成以下を裏切つて、関東軍の一翼となつた秀秋の麾下きかに。

けれど、五郎右衛門は、石舟斎にも弟の宗矩にも、ついぞ姿を見せなかつた。

その後、慶長七年。

小早川家は断絶した。——彼もまた流浪るろうして、伯耆ほうぎ国の横田内膳ないぜんの飯い山城やまに身をよせていたが、偶々《たまたま》、その内膳は、主筋にあたる中村伯耆守ほうぎのかみに殺害され、飯山城は伯耆守

の手勢にとり囲まれるところとなった。

五郎右衛門は、城内にいて、内膳の子主馬助しゅめのすけをたすけ、まっ

たく義のために、寄手の大兵をうけて奮戦したのであつた。

城は、慶長八年の十一月十五日に陥おちた。その落城の際の彼の働きこそ、当時しばらく中国の武人たちに鳴り轟ないたものであつた。

五郎右衛門は、焰ほのおについて、城から半具足で討つて出たが、大太刀を揮ふるつて、仆たおれ歇やむまで、敵の甲かっちゅう冑武者十八人まで斬り伏せて戦死したという。

新陰流の古勢「逆風」さかかぜの太刀を平常へいぜいから得意としていたので、

その働きぶりは、殊にものものしかったとある。彼の従者の森地

五郎八も、よく戦つて斃^{たお}れた。

彼の豪勇ぶりは、中国地方に、一躍、柳生流の名を高からしめた。——けれど石舟斎は、そのうわさはやがて柳生谷に聞えて人々の語り種^{ぐさ}となつても、ただ暗然とするのみで、すこしも歡ぶ色は見せなかつた。

「彼の劍は、わしの本意でない。柳生流の劍の一面を具現した強さにすぎぬ。五郎右衛門に倣^{なま}うてはならぬ」
むしろそう云つて、周囲の子弟を誡^{いまし}めた。

長男の嚴勝としかつは先だち、その子久三郎は、朝鮮役で戦死し、次男の久斎、三男の徳斎、ふたりとも僧門に入つてしまふし、四男五郎右衛門は旅に果て、老齡の入道石舟斎の身辺も、ようやく、落らく寞ぼくとして、さびしげなものがあつた。

ひとり五男の但馬守宗矩むねのりに、伝血の望みは囑しよくされていたが、それも江戸常住となつて、稀 《たまたま》の便りが、せめての楽しみであつた。

ことし七十六歳の八月吉日。

彼はひとり焚ふん香こう静坐して、長巻の極意書がきをしたためていたらしい。

しかし、ふかく筐きやう底うていに秘めて、人にも示さず、翌年また新あら

たに一代の工夫と体験の精髓とを誌^{しる}し、その年の末、ふたたび晩年に悟得^{ごとく}した吹毛劍のことについて書き加えなどしていたが、翌年の春になると、長巻の末尾に奥書を染めて、ここにその業を終っていた。

「兵庫はいつ帰るのじゃ？」

時折、家人にたずねていた。

もうその頃、彼はひそかに、自分の天命に、ひとり期しているものがあつたらしい。青葉若葉は、ことしの夏もしずかに山城の一荘をつつみ始めていた。

石舟斎が、掌上の珠たまのように、眼にも入りたいほど、
鍾愛しゅうあい

して措おかなかつたのは、孫の兵庫利としとし厳だつた。

骨肉こつにく的にも、その天性の剣をも、彼はこの孫を、

「わが家やの至宝しほう」

と、珍重ちんじゆうしていた。

だから平常へいぜいもよく、

「そちは、他家から求められても、千石が一粒欠けても、仕官してはならない」

と、云っていたほどである。

肥後ひごの加藤清正から、彼と昵懇じつこんな黒田長政を介かいして、正式に

兵庫をその家中へ懇望して来た折も、

「千石ならでは」

と、断わった。ところが清正は、他の家士のふりあいもあるの
で、表向き五百石、内分千五百石、客分として迎えましよう
と、要求以上の好遇をもつて答えて来たので、

「それほどまで、孫の器量を御属望ごしよくもうくださるなら」

と、一切を長政に託して肥後へ遣やった。

けれどその交渉の最後にも、もう一つ石舟斎から清正へ条件を
云いたした。その条件とは、

「兵庫事ことは、天性、御奉公を懈怠けたいいたすようなものではござらぬ
が、何といつても、若年者、それに短慮たんりよのところもありますゆ

え、落度あつても、死罪三たびまでは、お宥^{ゆる}しありたい」

ということであつた。

これを見ても、石舟斎が、どれほど兵庫を熱愛していたかがわかる。しかしまた、その無理な条件をも容^いれてまで客分に迎えた清正の熱心と寛度も大きなものと云わなければなるまい。

その兵庫利厳が、肥後へ行つたのは二十五の年だつた。肥後にとどまることも短く、わずか二年で加藤家を辞し、その足で彼は九州中国から北陸地方を遊歴していたのである。

本年二十八歳となつた。先頃の便りでは、四月頃までには柳生に帰るとしてあつたが、五月にも見えず、六月も過ぎかけていた。

「……兵庫はまだ帰らぬか」

石舟斎は、病床について、寝たきりとなると、なおさら、それのみ待ちこがれているふうであつた。

「ただいま戻りました。兵庫でございまする」

秋の初め、秋の訪れ——。久しぶりな声は柳生家に聞えた。

石舟斎のよろこび方はいうまでもなかつた。

一日、秋の氣きの爽さわやかな昼。

「兵庫、こちらへ来い」

石舟斎は、病床を離れ、衣服もあらため、嗽水うがい、手水ちようずまでつ

かつて、奥の一室へ、孫の兵庫を呼び入れた。

「おからだは如何ですか」

「たいへん気分がよい。しかしもう枯木こぼくじゃ、もう咲く花は待たれん。たいがい秋の末か、この冬であろう」

「何を仰せられますか」

「死期のことじゃ」

「そ、そんな……ことは」

兵庫は泣き出した。二十八の——しかも千五百石で求められるほどの武士の偉材だったが、幼少から一倍愛された祖父のまえでは、やはりただの孫であつた。

「愚かな涙を……」

と、叱りながらも、石舟斎おもての面もまた、一抹の哀あい愁しゆうはある。人間と生れたからは、何人にも是非ない別離の傷心であつた。

「あらためて、今日はそちに授けておくものがある」

彼は自筆の「柳生流印可」の長巻に添えて、かつて自身が、上泉伊勢守からうけた、「新陰流相伝の書」「新陰絵目録」の三つをことごとく兵庫に授けたのだった。

「わしに一族の兒輩は多いが、これを役立たしてくれそうなものは、そちしかない。終生、師鑑としてこれに怠るな。道業はそち一身や一生のみじかいものではないぞ。世々ひろく末代の衆と国土に益さねばならぬ。これを享くる者の任はゆえに重い……たのむぞ、兵庫」

江戸表の但馬守宗矩たじまのかみむねのりは、国元の急報に接して、將軍家に暇いとまを乞い、落葉しきりな晩秋の駄路うまやじを、大和へさして急いでいた。にわかに病やまいのあらたまつた石舟斎は、病床からひとみを動かし、

「宗矩にも遙々はるばる見えられたか……」

と、將軍家へ対して済まないような呟つぶやきをもらした。

枕頭には、門下の木村助九郎、庄田喜左衛門、出淵孫兵衛、その他の他ほか、多くの直門がみまもつていた。

その人々もみな、紀州家へ、仙台家へ、浅野家へ、各仕官して一流一派をもう立てている者たちだった。

「心にかかるものもない」

石舟斎は、自分という巨幹から、枝となり葉となり花となり実みとなつてゐる一門の子弟をながめて、むしろ樂しげであつた。

諸家からの訪問、諸侯自身の見舞も絶えなかつた。

せんしゅう

泉州せんしゅうの沢庵たくあんなどが見えた日は、病室には談笑の声さえ聞

えた。奈良ならの宝蔵院胤栄ほうぞういんえいは、かれよりも十数年まえに歿して

いた。

冬が近づく。極寒ごくかんに入る。

病は篤あつくなるばかりだつた。

かれは一日、病臥のまま、その枕頭に、宗矩むねのりひとりだけを招

いて、

「見国の機——という旨を心得ておるか」

と、たずねた。

宗矩がつつしんで教えを乞うと、

「見国の機とは、兵法を通じて、一国の情勢を視ることである。剣理を基本として、経世民治の要を知ることじゃ」

と、云い、またやがて、

「そちは常に將軍家に対し、どういう心を旨として、剣を御師範申しあげておるか」

と、たずねた。

「天下を治むるの兵法をもつて」

と、宗矩が答えると、石舟斎は満足して、かすかにうなずきな

がら、

「——庶人これを学べばすなわち身を修め、君子これを学べば学識を修め、王侯これを学べばすなわち国を治む。——庶人より王侯君子にいたるまで、みなその道はひとつ」

と、大声で云つて、しずかに眼をふさぎ、ややあつてから、

「そちには何の憂いもない。これで安心いたした」

と、云つた。

きようか明日かとも見える容態になつても、石舟斎は決して厠へ通うのに、ひとの手を借らなかつた。手沢のかかつた細竹の杖について、病室の濡縁から後架へゆくのを常としていた。

折ふし十二月の極寒ではあるし、伊賀境の山々から、粉雪は舞

つて、掃^はいても掃^はいても縁にたまつた。板縁は鏡のように凍るの
で、誰もよく辻^{すべ}つては怪我をした。周囲の者は、石舟斎の足もと
をそこに見るたびに胆^{きも}を冷やしたが、石舟斎は決して辻^{すべ}らなかつ
た。

「あの御病体でありながら、何として？ ……」

と、人々がいぶかるのを耳に挟むと、石舟斎は枯葉^{こよう}のような頬
にすこし笑みをたたえて云つた。

「氷の縁^{えん}をあるいて、後架^{こうか}へ通ううちに、わしは工夫をこらし、
浮身の法というのを発明した。それは浮身の太刀とも名づけられ
るもの。……一太刀、把^とつて、宗矩にも兵庫にも示したいが……」

その宵^{よい}から昏^{こん}々として、遂に、彼の七十八歳の生涯は、雪ふ

かい柳生谷の晨、あした静かに終りを告げた。いやその遺業に悠久を約して大往生をとげたものと云えよう。

すでに死期を悟り、その死の迫っていた数日前まで、氷の縁を杖つきながら、なお、劍の工夫をしていた彼のごときこそ、眞の名人というべきであろう。ゆかしい哉、かな尊い哉。この心をもつてすれば、あらゆる道に達し得ぬ道はあるまい。

青空文庫情報

底本：「剣の四君子・日本名婦伝」吉川英治文庫、講談社

1977（昭和52）年4月1日第1刷発行

初出：「講談倶楽部」大日本雄弁会講談社

1940（昭和15）年9月～1941（昭和16）年4月

※底本は、物を数える際や地名などに用いる「ケ」（区点番号5-86）を、大振りにつくっています。

※初出時の表題は「日本剣人伝（三）柳生石舟斎」です。

入力：川山隆

校正：岡村和彦

2014年8月7日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.waozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

剣の四君子

柳生石舟斎

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

著者 吉川英治

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>